
公道（タクシー乗務見聞録）

ジッテル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

公道（タクシー乗務見聞録）

【Nコード】

N9727H

【作者名】

ジッテル

【あらすじ】

短編の「香道」に突然続きのストーリーが出てきましたので、タイトルを変えて連載にしました。実は実話（――）なんです。ヤバイのすべて偽名になっております。タクシー乗務員には守秘義務というものがあります。ばらしてはならないものですので、実名は出せません。それにヤクザ屋さんの多い土地柄ですので命にかかります。そのところよろしく願います。人生とは何か。人間のどうにもならない愚かさを見つめる物語です。

第1話 悔り（あなどり）（前書き）

こちらもう少しづつ編集を始めます。

多少ストーリーが変わることもあるかと思っています。

霊界ゲリラ隊を優先して編集しておりますので、

こちらは少し遅れ気味になります。

続きも始めますのでよろしくお願いいたします。

第1話 悔り（あなどり）

公道（タクシー乗務見聞録）

ジッテル

「臭い。^{くさ}」

という言葉に、

どうしてひとは

異常に興奮をおぼえるのだろうか。

私は中学まで親から怒られ、

ぶたれ続けて、

ひたすら耐え忍んできたせいで、

高校に入ってから

学校のことや成績のことは

何も親には言わなくなった。

親が学校のことを聞こうとしても

いつさい無視した。

力も強くなっていたし

柔道部に入って

体も大きくなっていたので、

親も手出しが出来なくなっていたようだ。

今までギュウギュウ締められて、

耐えてきた反動で

しめつけがなくなったとたんに、

自分で自分を

抑えることが出来なくなってしまっていた。

重圧を押しつけて

自分を出していたのが、

重圧がなくなっても

同じエネルギーが出てしまうために

行動が異常になってしまふのだろう。

高校はあの有名な俳優で

歌手のKが在籍し、

ラグビー解説者の

Mの出たところだ。

あの当時

ラグビーが強い学校で、

高校ラグビー日本一を賭けて

たたかっていた。

体育の指導はラグビー部監督のU先生で

授業はラグビーばかりやらされた。

ラグビー部員は休み時間になると

ボールを磨^{みが}かなくてはならないのだが、

ボールの革に唾^{つば}をたらして布で磨く。

それが気持ち悪くて

ラグビー部だけは

入りたくなかった。

そんな時期、

朝、登校時の地獄のラッシュアワー、

もう乗れないほど

すし詰めの電車に

駅員が体を押して、

また詰めこむのだ。

乗り込んだら最後

あとは身動きひとつ出来ず、

若いOLと向かい合ったりすると、

フェロモンと香水で

魚肉ソーセージが

破けそうなほど勃起した。

なかには私の耳元で

「うぶん」

などと小さい声でささやく

不届きなOLなどもいて、

私の興奮は絶頂まで跳ね上がり、

耳まで真っ赤になって鉄棒が

はがねになってしまう。

だからいつも

電車を降りて

駅のホームを歩くときは、

カバンを股間こかんに押し付けて

へっぴり腰で歩くしかなかった。

ある日、

いつも通りの

すし詰め of 電車の中にいた。

突然、

目にしみるような悪臭が

あたり一面に充満した。

「くっせー。

ばっかやろー」。

だれだ。

よりによって

こんな身動き出来ないところで、

くさい屁^へしやがって、

見つけたらただじゃおかねえぞ。」

ムカムカ

しながら学校に着いた。

授業が始まってしばらくすると、

オナラが出たくなってしまった。

困ったなと思ったが

我慢するのもつらいので、

音をたてないように

出口を緩めて

そっと漏らした。

たいがい、

においはないので安心なのだ。

と思った矢先、

鼻がどうかかなりそうなほどの悪臭が

あたりに漂^{ただよ}った。

あうー、

目にしみるー。

あの電車の中のおいと

まったく同じだー。

「くっせー。」

「だれだー。」

「おまえかー。」

「おれじゃねえ。」

「おれのせいにするな。」

まわりがにおいの主をなすり合っぬじて

授業が中断した。

あの電車のは

私が無意識にしていたのだろうか。

愕然がくぜんとして

脂汗あぶらあせが滴したった。

しかし

どういう訳だろう。

みんなが大騒ぎするのが

面白かったのか、

それ以来、

私はおならに異常なほど、

のめり込んでしまった。

教室で静かに授業を聞いている時、

おならを鳴らす、

ということに熱中したのだ。

皆がざわめくのが

快感になってしまつて

抜けられない。

そして、

いつのまにか

「ヘー助」

という、

ありがたいのか、ありがたくないのか、

よくわからないあだ名がついてしまった。

そのうち音だけでは、

つまらなくなつた。

「くさい」

ということに、

妙な快感を

おぼえるようになって、

それから

おならを臭くくさすることの研究に

没頭ぼつとうしました。

ネギ、にら、ニンニク、椎茸しいたけ、キャベツ、

においが付きそうなものを

手当たり次第に食べた。

ある日、

授業中におならが出たくなった。

突然、

いたずら心がひらめいた。

そうだ。

金子だ。

金子に嗅^かがそう。

音を立てず、

慎重^{しんちょう}にもらした屁で、

においがつえに上がって来る時間を

予測して、

となりの金子に

わからないところを聞くふりをして

呼んだ。

「なにがわからないんだってー。」

と金子が調子に乗って

こちらへ顔を寄せたのと、

においが上に上がって来るのが

ピタッと一致した。

「あつ、くせつ」

顔をそむけて

立ち上がると、

「ハーツ、ハーツ、」

と息を吐^はいて、

吸い込んでしまったおならを

肺から出そうともがいていた。

「金子ー、」

なに立ち上がってるんだー。

もっと真面目にやれー。」

先生がどなった。

「ちがいますよ。

こいつがくさいんです。」

「なに馬鹿なこと言ってるんだー。

早く座れー。」

先生に叱^{しか}られて

金子は懔然^{ふぜん}とした顔で

席に戻った。

私は考えてもみないほど

タイミングがよすぎて、

折り曲げた体を

痙攣けいれんさせながら

手足をばたつかせて声を出さずに

笑いこぼっていた。

しばらくたったある日、

その日は化学の授業があった。

化学の授業は階段教室で受けるのだ。

教室は坂になっていて

後ろのほうに行くほど

高くなっている。

私は一番後ろの席の

真ん中あたりに座った。

教壇が一番下に見える。

授業は退屈で頭が悪くて

訳がわからなかった。

突然ガス腹になって、

おならが出そうになった。

慎重に栓を緩めて

排出した。

この頃には研究も進んで、

そうとう

過激な臭さくさになっていた。

期待に胸弾ませて

まわりの反応を

伺うかがっていたが、

なんの反応もなく、

においもしない。

「なんだ、つまんない。」

と気分を変えて教壇に目を向けた。

すっかり

おならをしたのを忘れたころ、

最前列の生徒が

突然立ち上がった。

「くっせー。」

「誰だ。」

「くっせー。」

そのまわりにいた生徒達も

立ち上がって

逃げ惑^{まど}っている。

先生も顔をしかめて、

鼻を手でふさいで、

前のほうを

もう片方の手であおぎながら、

「早く窓を開けなさい」

などと叫んでいる。

前のほうの誰かがやりやがったな。

俺と同じ仲間がいたか。

と私は親近感を感じていた。

しばらくして、

また私はガスを催^{もよお}して

一発すかした。

が何のにおいもしなかった。

「きょうのは臭くないんだ。」

と、がっかりして黒板を見ていた。

先生が一生懸命講義をしている。

「くっせー。」

最前列がすくつと立ち上がった。

「だれだー。」

「早く窓開けろー。」

またか、

と先生が一呼吸おいて逃げだした。

「授業にならないなー。」

トイレ行きたい人は行って来なさい。

我慢しないで

はやく行きなさい。」

先生がたまらず訴えたが

誰も行く様子はなかった。

このようなときに

トイレなんかに行こうものなら、

あいつがやりやがった。

あいつはこんな臭い屁をしやがるのか、

ってことになってしまっからだ。

こうなっ たからには

死にもの狂いで

我慢するにちがない。

しかしそのときふと、

もしかしてこれは

空気が対流しているせいじゃないのか。

この位置で漏らした屁が

最前列を直撃しているのではないか、

という気がした。

多分、

屁のかたまりが溶岩のように、

ゆかを流れ下って行って

最前列のあたりで

上に上がっているのだろう。

まさしく対流だ。

こんなことがあるのだろうか。

あまりの以外さに

異常な快感と興奮が

湧^わき上がって、

一人で息も出来ないほど

体を折り曲げて笑い転げた。

そしてまた、

ひそかに屁^もを漏らした。

第2話 駅先頭

あれから

何十年経ったのだろうか。

どういう訳か

低崎線箱山駅の

タクシープールの先頭で

客待ちをしている

自分がいた。

子供のときから自惚うぬほれて、

人を人とも思わず、

傲慢^{しじまん}なだけで、

中身もなく

努力もしない人間を

神は奈落^{ならく}の底へ落とすのだ。

「組の事務所へ乗っけてつてくれないか。

このへんに組の事務所があるだろう。」

近寄って来た三十前後と思われる男が

声をかけて来た。

服はヨレヨレの白いワイシャツに

黒いズボン姿、

持ち物は何もない。

見るからに

信用出来ない雰囲気

漂わせている。

「組の事務所ですか。

いやー、

知りませんね。」

私は近くに組事務所があることは知っていたが

内心、

これはかかわりたくないな。

と思って知らないと答えた。

すると

男はタクシープールの中にいる他の乗務員に

次々聞き回った。

どついう事情があるのだろう。

切羽詰まって

必死になっているようにも

感じられる。

聞かれた乗務員達も

気を利かせて

皆が知らないと答えていた。

そこへ一人の乗務員が

「組の事務所なら

すぐそこにあるだろう。

国道の向こうにあるよ。」

何で知らないんだという感じで

乗務員に教えた。

私はまずいなと思ったが、

その答えた乗務員が

乗せて行くだろうと、

勝手に思ってしまった

人ごとのように聞いていた。

「あるのか。」

途端に

喜々として男が叫ぶように言った。

「じゃあ、

お前が乗っけてってくれるか。」

男がその乗務員に言つと

「私は先頭じゃないから、

そこの先頭に乗って下さい。」

私のほうを指さして言った。

「おい、俺かよ。」

話しが違うだろう。

余計なことを言うから

こんなことになっちゃうんだ。

うんざりした気持ちになったが、

男のほうは

ほっとしたように、

私の車に乗り込んで来た。

「その組事務所へ乗っけてってくれ。」

近いのか。

近くだって言ってたよな。」

男は落ち着きなく早口で言った。

私は出来れば乗せたくなかったので

「ええすぐ近くです。」

歩いて行けますから、

歩いて行ったほうがいいですよ。

お金がもつたいないです。

道、お教えしますから

そのほうがいいと思いますよ。」

私は男が

「じゃ、そうするか。」

と言つてあるうことを

期待して言つた。

「いいから行つてくれ。」

俺には道がわからねえんだからよ。」

一度乗り込んだら

テコでも降りねえぞというように

前の座席の背もたれにしがみついた。

第3話 組事務所

「お客さん、

組の事務所って言うても

どこの組ですか。

それがわからなければ

行っても駄目でしょう。」

料金払えるのかなと

思いながら尋ねた。

どう見ても

お金を持っているようには見えない。

「いいから行け。

どこでもいいから

行けばいいんだ。」

男は少しいらついて言った。

仕方なく

私は車を発進させた。

「近くにあるのは

中小会ちゅうしょうかいの

狭瀬組せませぐみですよ

。大丈夫ですか。」

私は念を押した。

「中小会か。」

男は言ったが、

それが別に困った風でもなかった。

ワンメーターで

事務所の前に到着した。

家の回りをコンクリートの塀が囲っていて

入口に街宣車が停めてある。

暴対法の関係で

組の看板を出すことが出来ないため、

知らない人には

普通の家にしか見えない。

「お客さん、

ここが狭瀬組の事務所です。」

これで料金もらって解放だ。

早く降りて欲しい。

私はメーターを止めて

料金を請求した。

「俺は北海道の解散した

うみやまぐみまんぶくかい
海山組満腹会の禿原 はげはら

という者だが、

ちよつと言って来てくれ。」

降りると思っていた男が

金も払わず、

降りようとししないで

言った。

「えっ、

どこへ行くんですか。」

私は訳がわからず

聞き返した。

「だから

満腹会の禿原が来たと言えはわかるんだ。

言って来てくれ。」

男は焦れたように言った。

「お客さん、

仁義は自分でやらなくちゃ駄目ですよ。

私が替わりに仁義したって

意味がないでしょう。

お客さんが行って下さいよ。

「私じゃ駄目です。」

何言ってるんだ、

この人は

ヤクザのくせに気が弱いんじゃないのか。

自分で仁義も出来ないで

何がヤクザだよ。

私は内心呆れて言った。

「いいから言ってこい。」

そう言えばわかるんだ。」

イライラしているのが

男の言葉で伝わって来る。

仕方なく

私は車を降りると、

嫌^{いや}んなっちゃうな、

と思いながら、

街宣車をギリギリにつけて停めてある

玄関のチャイムを鳴らした。

中から出て来る気配がない。

いないのか。

二、三回鳴らしたとき

中から声がして

ドアが外に開いた。

私はうしろに下がって

開くドアを避^さけた。

背中が街宣車に押されて

それ以上下がれない。

人が一人入れるだけの

隙間しかないのだ。

「誰だ。」

何の用だ。」

組の若い者が警戒した目で

凄^{すご}んで言った。

第4話 仁義

「あ、すいません。」

箱山はこやまタクシーですけど、

いま

お客さんで禿原さんという方が

こちらに言えばわかる

ということうかがで伺ったんですが、

禿原さんをご存知でしょうか。」

どう言えばいいのか

悩みながら相手に伝えた。

「禿原。」

知らねえな。

誰だそれは。

聞いたこともねえ。」

組員は警戒心を強めながら言った。

「そうですか。」

わからないですか。

じゃあ仕方ないですね。」

わたしは相手が知らないと言っのに

それ以上

何とかしろとは言えないので、

ドアを閉めて引き返そうとした。

不意に、

「私は北海道の解散しました

海山組満腹会の禿原と申します。

お見知りおきのほど

よろしくお願いいたします。」

横から強引に割り込んで来て

頭を下げて仁義をした。

「何者だてめえは。」

何しに来た。」

組員は声を荒らげて怒鳴った。

「どうした。」

何かあったのか。」

騒ぎを聞きつけて、

奥から幹部の山道が

怪訝けげんな顔で出て来た。

山道は腎臓でも悪いのか、

顔が以前とは見違えるほど

むくんでいて、

だいぶ具合が悪そうだった。

私は街宣車がいせんしゃに寄り掛かったまま

下がるに下がれず、

顔の前で

ヤクザ同士のやり取りを

見ているしかなかった。

「何言ってるのかわからねえ奴が

来てるんですよ。」

若い組員が山道に言った。

この時期、

中小会と米麦会こめむぎかいは

抗争事件に発展していて、

いつ襲われるかわからないため、

特に警戒を強めていたのだ。

「いえ、

怪しい者ではありません。」

禿原が警戒を緩ゆるめるように言った。

「何の用で来たんだ。」

組員は無駄なことは言わず

短く聞いた。

「一宿一飯

お願いしたいんですが。」

禿原は言った。

「一宿一飯か。

お前は海山組だろ。

海山組じゃ代紋が違うぞ。

代紋が違っちゃ駄目だ。

米麦会のほうへ行けばいい。

うちは駄目だ。

帰ってくれ。

運ちゃん馬山駅へ連れて行け。」

山道が追いつ返そうとして

言い放った。

馬山駅の近くには

海山会と義兄弟盃ぎきょうだいきさかつきを

交かわした米麦会傘下こめむぎかいさんかの組がある。

山道はそこへ連れて行けと言っているのだ。

「駄目ですか。

わかりました。」

禿原が頭を下げて引き返した。

「じゃあ

馬山の米麦会へ行ってくれ。」

禿原が言ったが、

何を思ったのか

「ちょっと

待っててくれ。」

と言に残して、

また組事務所のほうへ歩いて行った。

何をやっているのか。

なかなか戻って来ない。

私はまだあの客と

付き合わなくちゃならないのかと

気が重くなっていた。

第5話 待ち

何をやっているのか。

なかなか戻って来ない。

断られた腹いせに

良からぬ事を

思いついたのではないかと、

ふと思ったりもした。

待ちメーターの金額が

上がって行く。

どう見ても

金を持っていなさそうだ。

これからまた馬山駅まで行くとなると

運賃を払って貰えないのではないか。

私は不安になっていた。

それからしばらくして

禿原が戻って来た。

「馬山の組事務所へ行ってくれ。」

何をして来たのか

少し明るい顔で言った。

私は車を発進させながら、

「何してたんですか。」

と尋ねてみた。

「金貰って来た。」

禿原は恥ずかしげもなく

あっさり言った。

「えー、

代紋違いでも

お金出してくれるんですか。」

私は意外に思っただけ。

「東京の組事務所はくれないところが多いけど、

地方の組事務所は頼めば

代紋が違ってもお金をくれるんだよ。」

禿原がなに事もなげに言った。

そうだったのか。

組が解散してから、

こうやって食いつないで来たのか。

それだから

どこの組事務所でもよかったんだ。

私は納得した。

仕方なく

馬山駅まで行くことになってしまったが

時間にして15分位の距離だ。

「俺は北海道の海山組の

満腹会にいたんだが、

組が解散しちゃったんだ。

何で解散しちゃったんだろう。

ヤクザは組が無くなっちゃったら

どうすることも出来ないんだ。

本当に困っちゃうよ。」

禿原は溜息混じりに

愚痴^{ぐち}った。

「組が解散したんですから、

このさいどこかの会社に入って

仕事したらいいんじゃないですか。」

私は組が解散して

自由になったのだから、

仕事すればいいのではないかと

思ってそう言った。

「そうは言っても、

いまさら会社に勤めることも

なかなか難しいしな。

流れ者になるしかないんだ。」

禿原は投げやりに言った。

車窓に街路灯の明かりが流れて行く。

そろそろ

夜の9時を過ぎるところだ。

これで

馬山の米麦会の凶田組に行ったとして、

組事務所がわかるかなと

私は不安になった。

暴対法によって

組の看板を出せないのだ。

そのため、

だいたいの場所がわかっていても、

どこが組事務所なのかわからない。

弱ったなと思ったが、

まあ

駅前のタクシーに聞けば

誰か知っているだろうと

気を取り直した。

しばらく沈黙していた。

「おい、

包丁^{ほうちやう}買ってこい。」

突然、

突拍子もないことを

禿原が言い出した。

「え、

何ですか。」

私は相手が何を言っているのかわからず

聞き返した。

「包丁だよ。」

包丁を買ってこい。」

禿原が繰り返して言った。

シャブでもやってたのか。

訳のわからないことを言う奴だ。

包丁を買って来て、

それでタクシー強盗でもやられたんじゃない

馬鹿みたいなものだ。

「お客さん、

そんな物買ってどうするんですか。

必要ないでしょう。」

私は少し慌^{あわ}ててはいたが

平静^{へいせい}を装^{よそ}ってたしなめた。

「いいから買ってこい。」

買^かってくればいいんだ。」

禿^{かぶ}原^{はら}は私の言うことに

耳^{みみ}を貸^かそうともしないで言い張^はった。

タクシーは接客業^{せきかくぎや}なのだ。

お客^{おきゃく}さんをぞんざいに扱^{あつか}うことは出来ない。

張り倒^{はりたお}してやるうかと

思っ気持ちを抑えて、

わたしは

「もう9時過ぎで、

店なんか開いてませんよ。」

我ながら

いいところに気がついたと

思いながら言った。

第6話 コンビニ

「あ、

店が開^あいてねえか。

じゃいいや。

仕方ねえな。」

禿原が渋々諦^{しぶしぶあきら}めて言った。

やれやれ

何とか諦めてくれたかと

私は内心ホッとした。

これで向こうへ着いて

素直にお金を払って、

降りてくれればいいがなと、

早くこの仕事を済ませたい一心で思った。

道も半ば^{なか}を過ぎて、

前方にコンビニの看板の

明かりがともっているのが

見えて来た。

あと少し行けば馬山駅だ。

重い気持ちも少し軽くなった気がした。

「おい、

コンビニがあるじゃねえか。

あそこへ寄って

包丁を買ってこい。」

禿原が身を乗り出して言った。

またかよ。

コンビニに包丁なんかありやしねえよ。

どうしようもない奴だな、と

思ったが

タクシーは接客業だから

怒鳴りつけて、

殴り合いする訳にはいかない。^{なぐ}

「お客さん、

コンビニには包丁ありませんよ。

寄っても無駄だと思いますがね。」

ぶん殴ってやりたいと思いながら

私は言った。

「つべこべ言ってねえで、

いいから寄って買ってこい。」

禿原はイライラしながら言った。

タクシーは接客業なのだ。

お客さんの意向は

聞いてやらなければならない。

包丁は無いのがわかってるから、

一応店員に尋ねているところを見せて

諦めさせるしかないと

思い直して

「お客さん

お金はどうしますか、

無ければ買えませんけど。」

コンビニの駐車場に車を止めると

振り返って言った。

禿原を目前もくぜんであらためて見ると

30才くらいに見えていた顔が

意外に老けていて

50代くらいに見えた。

「金はあとから払うから

出しておけ。」

と禿原が言ったが

「立て替えは出来ません。

お金がないんじゃないんです。」

ただ店員に聞いて見るだけで、

お金は必要なかったのだが、

持っているのかどうか

確かめてみようと思って

言ってみた。

「金か。」

禿原はポケットに手を突っ込んで

探っていたが、

「これを持って行け。」

おもむろに

小銭がいっぱい握にぎられた手を

突き出した。

おいおい

金持っていないんじゃないか。

これだからこういう客は嫌なんだ。

さつき組事務所で

いくらもらったんだよ。

いくらもくれなかったのか。

まったく、

仕事になんかなりやしない。

私は仕事の邪魔をされている気持ちがして

愚痴^{ぐち}りたくなった。

「じゃあいいです。

包丁聞いてきます。」

どうせ置いて無いんだから、

聞いてやれば気が済むだろう。

私は車を降りて

コンビニに入って行った。

第7話 馬山駅

店の中に入ると

大学生らしいアルバイト店員がいた。

私はそばに寄って行って、

「包丁ありますか。」

耳元で声のトーンを落として

聞いた。

出し抜けの言葉に

店員は

「ぎょっ」

とした顔で私を見た。

客を乗せたタクシーの運転手が

包丁を買う。

店員は戸惑った様子で

「包丁は置いてないんですけど。」

と言った。

この様子を禿原は見ているから

これで納得するだろうと

私は車に戻った。

「やはり包丁はなかったですよ。」

禿原の表情を見ながら私は言った。

「じゃあいいや。」

やっと諦めたように

禿原が言った。

まったく困ったやつだ

と思いながら、

こんなことしていて

これから先どうするつもりなんだと、

ひとつとながら心配になった。

もうすでに

ホームレスなのだ。

これからどこかの組に拾ってもらおうとしても、

こんな情けない奴では

どこも拾ってはくれないだろう。

てんがいこども
天涯孤独で

誰にも看取られず

野垂れ死にするしかないのではないか。

これから先、

どうあがいてもどうにもならず、

どんどん下って行く

この人の人生の末路^{まつろ}が

確定してしまっているような気がした。

馬山駅に着いた。

駅前のタクシー乗務員に

凶田組の事務所を^{たず}尋ねたが

よくわからない。

しかたなく

私が以前聞いた、

うる覚え^{おぼ}の事務所の周辺を

探してみたが

結局わからなかった。

「お客さん、

組事務所はこのあたりにありますから、

あとはお客さんが近所で尋ねて

探してもらえますか。」

私ができることは

ここまでだろうと思って言った。

「俺はその寿司屋で呑^のんでるから、

組事務所を探して、

組の若いのを連れて来てくれ。

いいな。

必ず連れて来いよ。」

禿原はそう言いながら

降りて行くとする。

「お客さん、

だめです。

料金払ってから行って下さいよ。

これだけ金額が出ちゃってるんですから。」

私は慌^{あわ}てて言った。

「組事務所見つけて

組事務所で金もらってくれ。」

禿原が平然と言った。

「ふざけてもらっちゃ困りますよ。」

お客さんが組に仁義もしていないのに

組で料金払ってくれる訳ないじゃないですか。

じょうだんじゃないですよ。

お客さんに払ってもらえないなら

警察に行くしかないですが、

いいですか。」

私の態度もぞんざいになって来た。

「金がないんだ。」

禿原がしぶしぶ言った。

まったく、

これだよ。

結局最後はこうなるんだ。

これだから嫌なんだよな。

「全然ないんですか。」

いくらあるんですか。」

こうなったらしかたがない。

持っているだけもらっしかないな

と思いながら聞いた。

禿原はズボンのポケットに

手をつ突っ込んで

探っていたが、

一握りの小銭と

千円札一枚を出して

「これしかないんだ。」

と言った。

料金は待ち時間も入って

四千円を越えていた。

私はその千円札一枚と小銭を受け取って数えた。

三千円にも満たない額だった。

まるっきりタダでは、

この金額を私が自腹ひはらで

会社に払わなくてはならないことを考えたら

千円ちょっとした損失で済むなら

いいかと思った。

「それじゃあ、

これだけでいいですよ。

あとはサービスしておきます。」

と言ってタクシーのドアを開けた。

禿原は降りようとしたが

振り向いて、

あそこの寿司屋にいるから

組の若いのを連れて来てくれ。

わかったな。

必ず連れてこいよ。」

念を押して降りて行った。

私は迷ったが、

少々禿原が気の毒に思っ

組事務所を探して

若いのを連れて行ってやろうかと思った。

そして、

そのすぐ近くにある

大草タクシーの事務所に入って行って、

中にいた無線番に

今までのいきさつを話した。

「それはこれ以上、

関わ^{かか}らないほうがいいです。

ろくなことはありません。

放^{ほう}っておきなさいよ。

このまま帰っちゃったほうがいいですよ。」

無線番が心配して言った。

私はそれもそうだなと思って、

禿原には済まない気がしたが、

そのまま帰ることにした。

第8話 熟女

タクシーはどのような人が

乗って来るかわからない。

いつも乗ってくれるお客さんもいれば、

初めての人も乗って来る。

毎日がさまざまな人々との出会いなのだ。

駅に電車が着いたようで

ゾロゾロ

と階段から人が降りて来た。

タクシー乗り場を

素通りして行く。

客待ちで長いこと待っているのは

お尻が痛くなって、

つらいものだ。

それでも生活のためには

耐えなければならぬ。

おばあさんが歩いて来た。

年齢が六、七十代だろうか。

まっすぐ乗り場へ向かって来る。

これは乗るな。

私はドアを開けた。

少し小太りの

かわいいおばあさんだ。

「ありがとうございます。」

どちらまででしょうか。」

「箱山団地まで。」

とおばあさんが言った。

「かしこまりました。」

私は走り出しながら

メーターを

賃走ちんそうにした。

「今日は天気がいいね。」

おばあさんが話しかけて来た。

「馬山の羊川デパートで

買い物して来たんだよ。

いい物買おうと思ったら

羊川デパートまで行かないと

ないからね。」

よくしゃべるおばあさんだ。

「デパートには

いろいろ種類が揃そろっていますから

見て歩くだけでも楽しいですね。」

私も相槌あいづちを打った。

しばらく沈黙が続いた。

不意に

「主人が亡くなっちゃったから

気楽だけど、

ひとりで家にいるのは寂しいよ。」

おばあさんがしみじみ言った。

「そうなんですか。」

私はどう返事をしていいかわからず、

ひとこと言って

黙っていた。

突然、

何を思ったか

「お金が足らなかつたら

体で払うからね。」

おばあさんが言った。

「えっ。」

思わず私は聞き返した。

「タクシーのお金が足らなかったら、

体で払うよ。」

おばあさんは繰り返して言った。

私はどう返事をしていいのか、

黙っている訳にもいかず、

ましてや

「いいですよ。」

とも言えず、

「ああ、そうですね。」

と言っしかなかったが、

しかし、

ここで

「今日は、お金持っていないんですか。」

と訊^{たず}ねたとして

「ないのよ。」

なんて言われでもしたら

どうすればいいのだろう。

「だから、体で払いたいの。」

なんて。

そうなっちゃうのかな。

すっかりしたことは

聞けないぞと

自分を戒めた。^{いまし}

そして、

あらぬ妄想が意識の中を

渦巻きながら、

誰がそのようなことを

このおばあさんに教えたのだろうと

思った。

過去にタクシー代を

体で払ったことがあったのだろうか。

私は釈然^{しゃくぜん}としない思いがした。

ある日の夕方、

仲間の乗務員の泥田が

馬山駅から若い女性を乗せた。

どこかのクラブのママなのか。

目も醒^さめるようないい女だ。

女に目がない泥田は

すっかり舞い上がってしまった。

気持ちはウキウキして

アドレナリン全開だ。

世間話などしながら大橋を渡った。

そこから道が広くなって

スピードが上がる。

すっかりドライブ気分だ。

しばらく走ったところで、

不意に

「運転手さん」

女が声をかけて来た。

泥田は話しの出鼻^{ひしな}をくじかれて、

おやつと思いながら

「なんですか。」

と返事をした。

「あの一、

私、いまお金持っていないんです。

うっかりして、

お財布忘れて来ちゃって。

お金なくてタクシー乗っちゃ

いけないですね。

運転手さんも困るでしょうし、

だったらこうしません。

あそこのホテルに入って

私の体で払うっていうのはどうかしら。」

女は言いにくそうに言った。

第9話 ホテル

泥田はそう言われて

前方を見るとホテル

「アツチツチ」

のネオンが目飛び込んで来た。

今日は最高にツイてるな。

こんなにいい女だぜ。

それも

相手のほうから言ってくるんだから、

願ったり叶^{かな}ったりだ。

こりゃあ、

行くしかないだろう。

期待と妄想もっそうが膨ふくらんで、

興奮は爆発寸前だ。

こういったことは

過去に幾度かあって

慣なれてはいるが、

どうしても

興奮してしまう。

「ああ、

いいよ。

金がなければ、しかたないよ。」

泥田は適当に

いい加減なことを言って、

すぐに車のコースをホテル

「アッチッチ」

の方向へ向けた。

泥田は以前、

東京で長いことタクシーに乗務していたが

雲助くもすけタクシーの代表のような

古株ふるかぶの運転手だったのだ。

エントツや相乗あいのりはやりたい放題、

相乗りで

全員から少し割り引いた料金を取って、

公営ギャンブル場から

駅までのピストン輸送で、

一日の仕事が終わったところには

大工の日当の

三倍くらいが

ポケットに入っていたという

タクシー黄金時代も経験していた。

悪いことをするのは

当たり前のような考え方で

言葉も乱暴で、

ヤクザ者のような運転手は

来させないでくれ、

という苦情が

よく来たりしていた。

エントツとは、

空車のまま

お客を乗せて料金をいただくことで、

賃走にしないため

営業明細のレシートに

記録されない。

受け取った料金は

自分のポケットに入るのだ。

これは業務上横領で、

勿論違法行為になる。
もちろん

泥田は、はやる気持ちを押さえて、

駐車場に車を止めると、

慣^なれた様子でフロントに声をかけて

部屋へ入って行った。

女は黙^{もく}ってついて来る。

部屋はカラオケが出来るようになっていて、

ゆったりした広さがあり、

ダブルベッドがドデンと中央に

設^しえ^あてある。

入口の右側にバスルームがついている。

部屋に入ると泥田が

「一緒に風呂へ入るかい。」

なれなれしく女に聞いた。

すっかり恋人気分だ。

女はソファーに腰をおろしたまま、

もじもじしながら

「恥ずかしいから先に入って下さい。」

と言った。

恥ずかしいなんて

以外にうぶでかわいじゃねえか

と泥田は着ている物を脱いで、

ニヤニヤしながらバスルームに入って行った。

あとから入って来るのだろうか

ワクワクしながら体を洗って

シャワーで流すと、

浴槽に浸かった。

まだかな。

女があとから来るものだ

思い込んでいたのに、

まるつきり気配もない。

なんで来やがねんだ。

恥ずかしいなんて玉かよ。

まあいいや。

俺が出てから入るつもりなんだろう。

そういうことなら

早く出てやらなくちゃなんねえな。

泥田はバスタオルで

頭を拭きながら

バスルームを出て

「風呂空いたよ。

入って来ねえかい。」

と頭からタオルをはずしながら言った。

あつ、

突然

泥田は声もなく

目を見開いたまま

棒立ちになって

固まてしまった。

第10話 男

タオルを頭から外した途端、

目の前のソファーに

髪の毛を短く刈り込んだ男が

反^そっくり返って

無言で

ジッと

泥田を見ていた。

その横に女が俯^{うつむ}いて

座っている。

そして

入口を塞^{ふさ}ぐように

三人の態度の悪い若い男達が立っている。

泥田は慌てて

下半身をタオルで隠した。

何が何だか訳がわからず、

頭は混乱している。

この事態をどうしたらいいのか。

いろいろ考えたが、

考えがまとまらない。

「俺の女になんてことをしてくれたんだ。」

数呼吸の沈黙の後、

男が口を開いた。

「何もしてないです。」

この女が行こうって言ったから

ここへ来ただけで、

なにもないです。」

泥田は気が動転して、

何を言っているのか

わからないような言い訳をした。

「じゃあ、

その格好はなんなんだ。

女と同じ部屋にいる男が

裸になっているじゃねえか。

これで何にもないだと。

ふざけたことを言うんじゃない。
」

男が声を荒らげた。

泥田は反論出来ずにうなだれて

黙るしかなかった。

ああ、

失敗したな。

あそこで声をかけられたとき

何で気が付かなかったかな。

これはヤクザだよ。

まずいことになっちゃったな。

どうしよう。

泥田の考えは堂々巡りして先へ進まない。

取りあえず服を着なくちゃ。

裸じゃまるで格好がつかない。

泥田は服を着るタイミングを謀^{はか}っていた。

「お前の会社の社長を呼べ。

電話しろ。」

男が言った。

「えっ、

社長ですか。」

泥田は会社に知れたら

まずいことになるなと思って、

どうしようかと

思い惑^{まど}つたまま動けずにいた。

「なに突^つっ立^っつてゐるんだよ。

会社の従業員が営業車で

こんなことしてるんだ。

お前んとこの社長にも

責任があるだろう。

早く電話しろ。」

男が怒鳴った。

泥田はもうこうなったら諦めるしかないと

覚悟を決めて電話をかけた。

たまたま

社長がいたが話を聞いて、

しかたなく

ホテルまで来てくれることになった。

社長を待っている間、

男は泥田と女に

「俺を裏切るとはいいい度胸じゃねえか。

裏切りは絶対許さねえ。

裏切るからには

覚悟は出来ているんだろうな。

この責任はどう取ってくれるんだ。

どうするつもりだ。

俺の顔に泥を塗られたんじゃあ

このままじゃすまねえんだよ。」

と恐怖を煽^{あお}るような

言葉を言い続けた。

しばらく経って

社長が入って来た。

「君はいつたい何をやってるんだ。」

入って来るなり、

この有様を見て

社長は呆然^{ぼうぜん}として言った。

第11話 おちんちん

社長が来たのを見ると

男が立ち上がって

「それじゃあ、

ちょっと

車でついて来てもらえますかね。」

と言った。

「おらあー、

お前も来るんだよ。」

若い組員達が泥田の両脇を抱えて引っ張った。

「ちょっと待って下さい。」

服を着ないと外へ出られないですよ。」

泥田が慌てて言った。

「そのままだ。」

それが証拠だからな。」

男が言うと

若い組員達に目配せした。

組員達は嫌がる泥田に

罵声を浴びせながら

強引に引っ張って行って、

駐車場に置いてある車に

押し込んだ。

外は陽が落ちて、

昼間の暑さも和らいで、

あたりはすっかり

暗くなっていた。

ホテルの支払いを

代わりに済ませた社長が

あとから泥田の服を持って、

運転して来た自分の車に乗り込んだ。

男は自分の車に女を乗せると

ライトを点灯させて、

ゆっくり発進させた。

三台の車が県道を

西へ向かって行く。

どこへ連れて行かれるのか。

この暗がりに紛れて、

人の来ないような山奥で

なぶり殺しにされるのか。

どんな目に遭わされるのか。

泥田は裸で引き回される

屈辱感と恐怖に怯えていた。

5分ほど走ったろうか、

車は県道の信号を左に曲がって

細い道を入れて行く。

右へ大きくカーブした先が

行き止まりになっていて、

広くなっているところで

車が止まった。

男が車を降りて

後続の車がついて来るのを

確認してから

女に声をかけた。

女はかつたるそうに

車を降りた。

他の車も入って来て

空いている場所へ車を止めた。

泥田は裸のまま

外へ引っずりだされて

あたりをオドオドと見回した。

その空き地の入口の右側に

家があつて、

それが組の事務所になっている。

その空き地の隅に檻があつて、

その中で

虎が吠える声が聞こえていた。

そこは馬山市川北町、

米麦会中田組の

組事務所だったのだ。

あとからわかったことだが、

その男は

中田組の組員で本上という者だった。

泥田と社長が本上に促^{うなが}されて

事務所の中へ入って行くと、

本上がソファーに、

どかっと座ると

タバコに火をつけて

上から目線で、

まるで職員室の先生の前で

立たされているような二人を見た。

「どうするかね。」

こいつは俺の女と平気であんなことを

してたんだよ。

社長さんも現場を見たんだから

証人だ。

どうです。

ひでえ話しじゃないですか。

これでしらばっくれられちゃあ、

こっちとしても

考えなくちゃならねえんだがね。」

静かな口調だがドスが効いている。

「申し訳ありません。

私は何も知らなかったんです。

許して下さい。

お願いします。」

泥田はさすがのように言った。

社長は何をどう言ったらいいのかわからず、

言葉もなく立っている。

「女に手をだされて

許せると思うか。

俺の面子^{めんづ}がたたねえよ。

この落^{おち}としまえを

どうつけるつもりなんだ。

事と次第^{しだい}によつちやあ、

あの檻^{かぎ}に入^いってもらうしかねえな。」

本上^{ほんじやう}は事もなげに言^いつた。

泥田^{どでん}はあの檻^{かぎ}の中の

虎^こに食^くわれるのではないかと

恐怖^{こふ}に怯^{おそ}えた。

「おらあー、

どうするんだよ。

責任取れ、

助平野郎。」

「お前は精子くせえんだよ。

年中こんなことやってんだろ。

変態野郎。」

「これだけ兄貴に恥かかせやがって、

申し訳ありませんで済むか。

ばかやろう。

どう落としまえつけるか

考えるんだよ。」

若い組員達が口々に罵^{ののし}って

泥田をますます怯^{おび}えさせる。

そのうち、

一人の組員が

カッターナイフを取り出して

チャリチャリツと

刃を出したかと思うと、

「この、おちんちんがいけないんだね。

いけないおちんちん、

いけないおちんちん」

と言いながら

カッターナイフの刃の腹で

ペタン、ペタン、ペタンと

泥田のちんこを叩いた。

そのうち

「こんなことしちゃって、

いけないおちんちんだね。

切っちゃおうか。」

言っが早いか、

刃のほうを当てると

そのまま

グーッ

と力を入れて来た。

「あー、

許して下さい。

金払います。

いくらですか。

言っして下さい。

金払うから許して下さい。」

悲鳴のような声で言った。

「俺は金を出せとは言っていないぞ。

だが、

そっちが金で責任を取りたいって言っなら、

それで許してやってもいいんだが、

いくら出すんだ。」

本上が無表情で言った。

「五十万出します。」

泥田が言った。

本上の顔がフツと曇った。

「俺もずいぶん舐められたもんだ。」

お前にとって、この女は

そんな値打ちしかなかったのか。

ただ弄ぶだけの女だったんだな。

許せねえ。」

本上が不満をあらわにして言った。

「この野郎、

こんな金で済まそうなんて、

完全に舐め切ってるんだな。

ばかやろう。」

「お前は悪いことしたなんて

思っちゃいねえんだ。

これじゃあ、

おちんちん切らしてもらうしかねえぞ。

いいか。

切るぞ。」

口々に若い組員が罵って、

また

カッターナイフの刃を当てた。

「あー、

百万円出します。

百万円で勘弁して下さい。」

半ベソをかきながら泥田は叫んだ。

「百万か。」

そっちがそうまで言うのなら

仕方ねえな。

まあ、

俺だって聞き分けのない人間じゃないんだ。

そっちがちゃんと筋を通して

許して欲しいと言っなら、

こっちも許すしかないだろう。」

本上は渋々

許してやると言つように言ってから、

「いつ払うんだ。」

と言った。

泥田はしばらく考えていたが

「明後日くらいには用意出来ると思います。」

と言った。

「そうか、

用意出来たら電話しろ。」

と本上が言つて、

泥田はやつと解放された。

そのあと、

泥田は金を何とか工面して、

払うことになってしまった。

最初から狙われていたようだ。

「筒もたせ」

を仕組む側も

百発百中を狙つて

下調べをして来る。

まんまと引っ掛かってしまったのだ。

私がタクシーの乗務を始めた頃、

先輩から

「女から誘われて、

ホテルを指定されたら

話しに乗るなよ。」

とよく言われていたことを

思い出していた。

第12話 無線

それからしばらくたって、

その虎が逃げ出して

大騒ぎになった。

餌を与えた組員が

鍵をかけるのを忘れたらしい。

虎は近所の住宅街に逃げ込んで、

姿をくらませたが、

警察官と猟友会が動員されて、

気の毒な虎は

撃ち殺されてしまった。

しかし組関係で

行方不明になっている者がいるらしいが、

誰かが殺して

虎に食わせてしまったのではないかと

陰では噂うわさになっていた。

そして

この本上というヤクザの名前を聞いたとき、

私はタクシーの仕事を始めた頃の出来事が

鮮明に甦よみがえつて来た。

タクシーの乗務というのは

慣れていないと酷く^{ひど}神経を使うものだ。

連日、道がわからず、

客から怒鳴られ、

おまけに酔っ払いの客にはからまれて、

ストレスで首から左肩にかけて

神経痛になっていた。

寝ていても寝返りも出来ないほどの

痛みが出てしまって、

首はうなづいたりすると

左の首、肩、指先まで

ズドーンと

激痛が走る。

うっかり

客の話しに相槌あいずちを打ったりすると、

その衝撃で、

思わず悲鳴をあげそうになるのだ。

ハンドルを回すのも

つらい状態だった。

「箱山駅先頭どうぞ。」

無線が鳴った。

私の番だ。

「35」

35号車に乗っているため

その番号を言った。

「35、ホテルニュー浅山、

従業員さんからの電話です。」

無線番が言った。

「了解」

お客さんからの電話じゃないんだな

と思いながら無線を返した。

ニユー浅山は

駅からさほど離れていないところにある。

ホテルに着くと

部屋が五、六戸ほど

一戸建の小屋になっていて、

どの小屋かわからない。

どこだろうと戸惑^{ごまご}っていると、

従業員が出て来て、

人目を憚^{はば}るように

ヒソヒソと

「その出入口のところに

車をピッタリ横付けして、

ドアを開けて待っていて下さい。」

緊迫した表情で言った。

ただならぬ様子に

ドキドキしながら横付けして、

ドアを開けて待っていた。

第13話 女

不意に小屋のドアが開いて、

若い女が体を折り曲げながら

車のドアに隠れるようにして

乗り込んで来た。

両手に紙の手提^{てひ}げ袋を

六個持っている。

何を詰め込んだのか、

パンパンに膨^はらんでいて、

うしろの座席がいっぱいになった。

「中年の女の人、

見なかったですか。」

女は怯^{おび}えた顔で私に聞いた。

「中年の女の人ですか。

いなかったですよ。」

何か危険な雰囲気を感じながら

私は答えた。

「早くここから離れて下さい。

早くして下さい。

お願いします。

尾行されているかも知れないから、

グルグル回って下さい。

今、女の人が包丁を振り回しながら

部屋に殴り込んで来たんです。

怖かったー。

逃げ回ってて

他の部屋へ隠れていたんですが、

まだこの辺にいるはずですよ。」

女は一気に話した。

私は息をしても痛い左腕を延ばすと、

震える指先で

賃走ちんそうのスイッチを押しながら

走り出した。

女は後ろを気にして

幾度も振り返って、

尾行されているかどうか

確認していた。

「どうしてそうなっちゃったんですか。」

事情もわからず

尾行を巻くために走り回っていても、

対処のしようがないので私は聞いた。

「私は部屋に彼氏と一緒にいたのよ。

彼氏はヤクザなんだけど、

殴り込んで来たのは彼氏の奥さんなの。

すごい剣幕で

包丁振り回して部屋に入って来たら、

彼氏は逃げてどっか行っちゃったの。

私が追いかけられちゃって、

必死で逃げて

他の部屋に今まで隠れていたのよ。」

と女は言った。

女を危険にさらしたまま、

自分だけ逃げる。

男らしくない。

情けない奴だ。

そんなんではクザなんてやれるのかと

私は思った。

任侠の世界は

男を研^{みが}くとか言う人もいるが、

研ぐどころの話ではない。

私は後ろをこまめに確認しながら、

しばらく走り回った。

「運転手さん、

彼氏に連絡しなくちゃならないんで、

どこかに電話ないですか。

早くしないと殴る蹴るされちゃうの。

あのヤクザは夫婦して酷い^{ひど}んだから。

お金が欲しいと私のアパートの窓ガラスを

メチャメチャに割っちゃうの。

それから子供の目の前で

私を殴る蹴るするのよ。」

と女が言った。

「そうなんですか。」

ヤクザなんてそんなもんだ

と思いながら言った。

携帯電話を持っている人は

まだ今ほど多くはなかったため

公衆電話はあちこちにあった。

しかし探すとなると見つけるには

苦労する。

運転しながら

公衆電話のありそうなところを

目で探りながら

客との会話を続けた。

「だとすると

今回も何か下心があつて、

わざと仕組んだんじゃないんですかね。

あの夫婦の狂言かも知れませんかよ。」

私は憤慨した勢いで

想像したままを言った。

「あ、そうなのかな。」

「狂言なんだろうか。」

女は考え込むように言った。

道が住宅街のカーブに差し掛かったところに

自動販売器がいくつか並べてあつて、

そこに公衆電話を見つけた。

「電話ありますよ。」

車をカーブのところに停めながら言った。

結構交通量が多い場所で、

迷惑がられて

クラクションを鳴らされたりしながら、

女の電話が終わるのを待っていた。

長い時間待たされたあと

「ちょっと電話に出て下さい。

話があるそうです。」

戻って来た女に言われて

恐る恐る受話器を取った。

「もしもし、

電話替わりました。」

相手はヤクザだ。

へたをすると、

とんでもないことになりかねない。

「山川さんかい。」

受話器の向こうから

男が私の仕事仲間の名前を言ってきた。

山川さんはこんなヤクザと付き合っているのか。

意外な思いで

「いえ、違います。」

相手の思った通りではないことを

こちらが言わなければならないことに

恐れを感じながら言った。

「そうかい。」

山川さんじゃないのか。

じゃあ、

その人をタヤマホテルまで連れて来てくれるかい。」

男が言った。

「はい、かしこまりました。」

私が答えて受話器を女に渡した。

そのまま私は車に戻ったが、

女はしばらくのあいだ

男の指示を受けているようで

かなか戻って来なかった。

第14話 タヤマホテル

それからまた

長いこと待たされて、

受話器を置いた女が戻って来た。

「それではタヤマホテルまでお願いします。」

女が言った。

「はい、タヤマホテルですね。」

私は答えてから

馬山駅の近くの

タヤマホテルへ向かった。

まったく

厄介^{やっかい}な仕事に巻き込まれたな。

嫌^{いや}んなっちゃうよ。

仕事になんかなりやしない。

今頃仲間は次々仕事をして

稼^{かせ}いでいるだろうと思って

情けない気分になっていた。

「私は浅草のソープに勤めてるの。」

女が少し私に気を許して来たのか

自分のことを話し出した。

「浅草ですか。」

じゃあ、

浅草からこちらまで出向いて来たんですか。

大変ですね。」

ヤクザに呼び出されて

わざわざこんなところまで

来させられたのかと思うと、

かわいそうになって聞いた。

「東京から引越して来て、

いま来田にアパートを借りて住んでいるの。

ヤクザの彼氏がこっちに住めって言ったから、

来田から浅草まで通っているのよ。」

と女が言った。

「しかし仕事で稼いでも

ヤクザにお金持つて行かれたんじや

何にもならないですね。

生活が大変でしょう。」

何でヤクザから逃げないのだろうと

疑問に思いながら言った。

「そうよね。」

と女は言っいて言葉を濁にごした。

私は話題を変えようと

「私も東京に住んでいたことがあるんですよ。」

と言った。

「えっ、そうなんですか。」

私は東京で生まれて、

東京で育ったの。

運転手さんもそうなんですか。」

興味があるように女が言った。

「いえ、

生まれたのはこちらのほうなんです

育ったのが東京なんです。

父親の仕事の都合で

五歳のときに東京へ移り住んだんです。

だから小学校、中学校、高校まで東京です。

高校はラグビーに力を入れてて、

体育の授業は

ラグビーしかやらない学校だったんですよ。」

私は話しの流れで

高校のことを話題にして言った。

「ラグビーに力を入れてるところって、

どこの高校ですか。」

女が興味を示して聞いてきた。

「M高校です。」

と私は言った。

「えっ、本当ですか。」

私のお兄さんもM高校ですよ。」

驚いて女の声のトーンが上がったが、

私も驚いた。

「本当に。」

思わず声をあげていた。

女の年齢からいって

彼女の兄は私の後輩だろう。

何という奇遇なのか。

この広い世界の中で

東京で出会うならまだしも、

東京から離れた地方都市の

タクシーの中で会うなんて

ありえないことだ。

おまけに

ヤクザに食いつかれた

後輩の妹とはどういうことだろう。

何とかならないのか。

出来れば助けてあげたいが、

相手がヤクザでは

へたに手は出せない。

向こうは徒党とくどうを組んで

力つづくで潰つぶしに来る。

私一人では助けることは出来ないだろう。

「どうしてヤクザと手を切らないんですか。

このままじゃ、あなたも子供も

どうにもならないでしょう。

警察に相談してみたらどうですか。」

と私は言っではみたが、

警察は「民事介入せず」ということで

取り合ってくれないか、

と考えると暗澹^{あんたん}たる想いになった。

女もそのように思っていたのか、

無言のまま悩んでいるようだった。

手を切るうにも、

このヤクザからすれば

貴重な金づるだ。

女から金を巻き上げることしか出来ない男

からすれば、

やっと手に入れた

この女に逃げられたら

生きて行くことが出来ないだろう。

女が手を切りたくても

放^{はな}しはしない。

能力のないヤクザには

満足なシノギなど出来ないのだ。

「あら、

運転手さん、

どこへ向かっているんですか。

道が違ふようですが。」

突然、

女が気付いて言った。

第15話 電話

「えっ、

馬山のタヤマホテルですよね。」

私は意外な言葉にうろたえながら

聞き返した。

「違います。

浅山のタヤマホテルです。

大変。

ここから戻ると

どのくらいで行けますか。

でも、

間に合わないかな。

少しでも遅^{おく}れると殴^{なぐ}られるの。

すぐ電話しなくちゃ。

電話ないですか。

電話があつたら止めて下さい。」

女はあわてて言った。

私も

これはただではすまないな。

へたをすると殴られるんじゃないか。

えらいことになった。

大変なことをしてしまったと

あぶらあせ
脂汗をにじませて

電話を探した。

当時

私はタクシーを始めて

日も浅く

馬山のタヤマホテルは知っていたが、

浅山にもタヤマホテルがあるとは

知らなかったのだ。

おまけに携帯電話も

今ほど普及していなくて、

持っている人はまだ少なかった。

「あつ、

コンビニがあります。

あそこに止めますから。」

どうなっちゃうんだろうと

不安になりながら

駐車場に入ってドアを開けた。

女は車を降りると

急いで公衆電話のところへ行つて、

百円玉を入れながら話し始めた。

ヤクザの彼氏は

携帯電話を持っているようだった。

公衆電話から携帯電話にかけるのだから

料金は高い。

百円玉がどんどん入って行く。

ヤクザの彼氏には

彼女がどれだけお金を払おうが

知ったことではないのだろつ。

私は無線で本社を呼び出した。

「浅山のタヤマホテルは

どのように行ったらいいんでしょうか。」

無線で聞いても

わからなかったらどうしようと

ドキドキしながら

私は聞き耳を立てた。

「浅山のタヤマホテルですか。」

オペレーターの無線が入って来た。

「はい。」

藁^{わら}をもつかむ思いで

私は答えた。

「今どこにいますか。」

オペレーターが現在地を聞いて来た。

「高樫のコンビニです。」

まだ無線の受け答えも

さまになっていなかったが、

私は何とか

冷静に答えることが出来た。

「そこからなら、」

国道を浅山方向へ向かって行つて、

千丸電機の会社の丁字路の信号を

左折して行くと突き当たりますから、

そこを右折。

そのまま道なりにどこまでも行つてください。

そうすると

浅山駅のところで

また突き当たります。

その突き当たりの

一本手前の丁字路を右折して行つて

通りに出たところの左側が

タヤマホテルです。」

無線での説明を一言も漏らすまいと

耳を凝らして聞いていたが

なんとか理解することが出来た。

「了解」

私は返事を返して

女のほうを見た。

何を話しているのか

まだ電話をしている。

ヤクザのほうから

何らかの指示でも受けているのか、

頷^{うなず}いたかと思うと

女が受話器を脇に置いて歩いて来た。

第16話 勘違い

女はそのまま歩いて来ると、

「話しがあるそうだから

電話に出て下さい。」

無表情で言った。
。

厄介やっかいだな

と思いながら車を降りると

受話器を取った。

そして

「電話替わりました。」

恐る恐る声をかけた。

「バカヤロー、

ふざけてんのか、

おまえ。」

電話に出るなり

ドスを効^きかせた怒鳴^{どな}り声がした。

「いえ、

申し訳ありません。

勘違いしたものですから。」

私は慌^{あわ}てて言い訳をした。

「なめてんだな。」

どうなるかわかってんだろうな。

申し訳ないで済むすと思ってんのか。」

相手は凄すこんで言った。

「すいません。」

申し訳ありません。」

私は言い訳の言葉も見つからないまま、

繰り返し謝あやまるしかなかった。

これはただじゃ済まないな。

相手がどんな要求をしてくるだろうか。

どうしたらいいんだろう。

私は内心^{おだ}穏やかではなかった。

「おまえ、

すぐ浅山のタヤマホテルまで来い。

わかったな。

すぐ来い。」

来たらぶん殴^{なぐ}つてやるという響^{なぐ}きが

男の言葉にあった。

「はい、

わかりました。」

私は浅山で殴られるかも知れない

と思いながら覚悟を決めて答えた。

女に受話器を手渡すと車に戻った。

しばらくして

女が電話を切って車に乗り込んだ。

車を発進させたが神経痛がひどく、

首を回せない。

腕が痛んで

止めておいたメーター機のスイッチを

押す指先がプルプル震えている。

たぶん彼女は私が怯^{おび}えていると

勘違^{かんちがい}しているのではないか

と気になった。

先程無線で聞いておいた記憶をたどって、

はらはらしながら線路ぎわの道を走った。

向こうに着いて

一発で場所がわからなかったら

また大変なことになる。

私の緊張はますます高まった。

浅山駅が見えてきて、

その先が突き当たりになる。

その手前を右に曲がるのだ。

私の緊張は極きよくに達していた。

「あつ、いた」

女が突然声を上げた。

第17話 レシート

「ここで止めてください。」

あそこに立ってるのよ。」

女は彼氏を見逃すまいと

気を張っていたのだろう。

私には見えていなかったが、

見落とさなかった。

「こつちを見てる。」

女が怯^{おび}えた様子で言った。

私は男と目を合わさないように

真っすぐ前を見続けて

少し行き過ぎて車を止めた。

へたに目と目が合ったりすれば、

すぐさま相手はきっかけを掴^{つか}んで

飛び掛って来るだろう。

犬と同じだ。

私は手早く精算を済ますと

ドアを開けた。

降りると思った矢先

「運転手さん、レシート下さい。」

女が言った。

私は出過ぎてしまったメーターのレシートを

渡してしまうのはまずいなと思ったが、

渡さない訳にもいかなかった。

そして後ろを振り向かずに

車を発進させた。

やれやれ、

やっと解放された。

私はほっと胸を撫なで下ろしながら

駅に戻るとタクシープールへ入った。

だいぶ時間を取られてしまった。

仕事の邪魔をされた気分で

私は腹が立ったが、

何回か駅からの仕事をして、

あのヤクザのことはもうこれで大丈夫だろう

と安心していた。

「35どうぞ。」

無線が私を呼んだ。

「35です。」

「どうぞ。」

何ことだろうと

一瞬思いながら応答した。

「先程浅山ちきほまでお送りしたお客さんは

何かあったんですか。」

無線番が言った。

私ははっとした。

あのヤクザだ。

やっぱり来たか。

「ああ、あれは女の人だったんですが、

私が勘違いして浅山のタヤマホテルへ行くところを

馬山のタヤマホテルへ向かってしまつて

引き返したんです。

でもその前に

後ろからつけられているかも知れないから

ぐるぐる回つて欲しい

と言われたんで

回りましたから

料金がでてしまいました。」

私は一気にいきさつを話した。

そして腹立ち紛れに

「彼女の彼氏がヤクザで

ひどいやつなんです。」

と言った。

そのとき

「あつ、

その話しは無線で流さないように。」

無線番が慌てて遮った。
おどろ

私は出鼻をくじかれて

話しをやめた。

「35、本社へ来て下さい。」

やっぱり呼ばれるか。

と思いながら

私は本社へ向かった。

第18話 事務所の応対

突然、

「ここは従業員にどういう教育してるんだ。」

白いトレーナーの上下を着た男が

会社の事務所に入って来るなり言った。

見るからに

その筋の雰囲気をかもしている。

「何かありましたか。」

苦情係の常務が尋ねた。^{たず}

「ホテルニュー浅山から

浅山のタヤマホテルまで行くのに

いくらかかるんだ。

こんなにかかるのか。

この料金はふざけてねえか。

どうなんだ。

わざと遠回りしたんだろう。

ええ、どうなってるんだ。

どう責任を取るつもりだ。」

レシートには

私の号車番号が記しるされている。

男はうまく圧力をかければ

金になるとでも思っているのだろうか。

しかし、

金を要求したり組の名前を出したりすると

暴対法（暴力団対策法）によって

恐喝でしよつ引かれる。

男は脅迫にならないように

言葉を選んで、

あくまでも合法的に金をせしめようと

目論^{もくろ}んでいた。

「ちょっと運転手に確認してみます。」

状況が理解出来ない常務が

無線で私を呼び出して事情を聞いた。

私はそのヤクザがいるとは思ってもよらず、

尾行をまくために

女に指示されてグルグル回ったことや、

ヤクザの男を批判する言葉を

強い語調で流してしまったのだ。

それを青くなつた常務が

慌てて止めた。

しかし箱山タクシーの事務所もしたたかだった。

料金が出過ぎたことは

女の指示だったことがわかって強気になった。

ひそかに小型の音声記録装置のスイッチを入れて、

相手の言葉を取っている。

少しでも脅迫の言葉が出れば

それを証拠として

警察へ訴える構えだ。^{かま}

お互いが腹の探り合いになっていた。

会社側は男の言い分を

聞き終わってから

「そうでしたか。

申し訳ありません。

この運転手は一人で乗るようになってから

まだ数日しか経^たっていない

ものですから

道がよくわかっていなかったようです。

もっと勉強するように徹底指導いたします。

行き先を間違えてしまいましたしたので、

こちらで頂いてしまいました料金を

お返しいたします。

これでお許しいただけないでしょうか。」

これ以上要求してきたら警察だ

と常務は腹に決めて言った。

音声記録装置は

作動している。

男はどう出るか。

男は女の指示で料金が高くなってしまった

ということをあばかれてしまった

分の悪さを感じていた。

これ以上要求しようとするば

暴対法にひっかかるのは明らかだ。

男は女が支払った料金分の金を

事務員から受け取って

しかたなく引き下がった。

私が箱山タクシーの事務所に着いたのは

呆気なく男が帰った後だった。
あつけ

私が無線で流したのを聞いていたから、

たぶん

今ごろ

あの男は自分が恥をかかされた腹いせに

嫌というほど女を殴りつけていることだろう

と思った。

ひどいことだ。

あとからわかったのだが、

その男が仲間の泥山から金を脅し取った

米麦会中田組の

本上というヤクザだった。

本上はその女を使って

金を稼いでいたのだ。^{かせ}

それから数年経って本上は倒れた。

一人で身動きも出来ず、

車椅子になった。

女もこれでやっと

幼い息子と二人で

平和に暮らすことが

出来るようになったのだろう。

第19話 見張り

「ちょっと頼んでもいいかな。」

駅先頭の私の車に乗り込んだ

坊主頭の男が聞いてきた。

雰囲気^{ふきんぎ}が何か暗く胡散臭い。

「なんでしょう。」

何を頼むって言うんだ。

私はとっさに拒絶反応を感じた。

こういう仕事は大概^{たいがい}面倒で

金にならないことが多い。

ことによっては断らなければならないな

と思いながら返事をした。

「ある車を尾行してもらいたいんだ。

その車が動き出すまで待つことになるんだが、

それがすぐかも知れないし

長くかかるかも知れないんだが

やってくれるか。」

高飛車な口調で言った。

なんだこの人は。

刑事なのか私立探偵なのか。

刑事なら警察の車があるから

タクシーは使わないだろう。

たぶん私立探偵だな

と私は推測したが、

その傲慢な態度に

カチンときて

反発心がムラムラと湧いてきた。

冗談じゃねえよ。

そんな仕事したくねえな。

私はどう言って断ろうか

と考えを巡らせて、

すぐには返事をしなかった。

しかし反面、

人をひそかに尾行するという陰湿な快感と、

ひよっとして

尾行するターゲットが恐ろしい人物で

危ない目に合うかも知れない不安と

恐いもの見たさの興味もなくなかった。

「出来ないなら

出来ないって言うてくれてもいいんだけど、

やってくれないか。」

言葉は少し遠回しに言っではいるが、

迫ってくる雰囲気は

何が何でもやらせたい

という想いがこもっている。

不意に

私はプロの尾行とはどういうものなのか

見てみたいという好奇心が

ムラムラと湧いて来た。

そして

それにつき動かされて、

「じゃあ、いいですよ。

やってみましょう。」

と言ってしまった。

言ったあとで、

なんだか不安になって断ればよかったかな

と後悔して心が揺れ動いたが、

やると言ってしまった以上

あとへは引けない。

「尾行はやったことがないので、

うまくいくかどうかわかりませんよ。」

とあらかじめ相手からクレームを

つけられないように

予防線を張っておいてから

メーターを賃送にして

探偵の道案内で走り出した。

駅前の道をまっすぐ行くと

信号を二つ過ぎた先で

信号のない狭い十字路に出る。

そこを右折して

家が立ち並んでいる細い道を抜けて行くと、

点滅の信号がついている十字路に出る。

そこを突っ切って

しばらく走ると、

斜め左に曲がる道がある。

そこを左に入って、

少し行くと大きい通りに出る
。

それを左折すると

製薬会社の営業所の前に着いた。

探偵は私に少し待つように言って、

車から降りると

営業所の脇にある駐車場のところまで

歩いて行った。

そして

何かを調べてから戻って来た。

「車があるからまだ会社にいるので、

出て来るまで待ちます。

あの信号を曲がったところなら

会社の裏から出て来る道と

表の道の両方を見張れるから、

そこで待つことにします。」

探偵はあらかじめ調べておいたのか、

見張りの最適な場所を指示した。

私は車をUターンさせ、

信号を右折して止まった。

そこは交差点に近く、

あまり広くない道で

通行の邪魔になるのはわかっているが、

そこで見張るしかなかった。

「私が表通りを見張ってるから、

そっちは裏道から出て来るのを

見張って下さい。」

探偵が緊張した面持ちで言った。

私は探偵が指示した車のナンバーを

見逃すまいと

裏道から出て来る車を一台一台

チェックし始めた。

第20話 尾行

その場所に車を止めてから

だいぶ時間^たが経ったが

目当ての車はなかなか出て来ない。

他のコースを通ったのかも知れない。

道は営業所から反対方向へ行っても

大通りに抜けられるのだが、

探偵は何故

こちらの方^た向だと決めたのだろうか。

なにげなく

ルームミラーを覗いたとき

白い車が通り過ぎたのが写った。

あまりにも長い待ち時間に

痺れが切れて、

悪戯心が

ムクムクと頭をもたげてきた。

「あつ、

いま白い車が通り過ぎましたよ。」

軽い気持ちで

冗談を言ったつもりだった。

途端に

悲鳴のような慌^{あわて}ふためいた絶叫が

車内に響き渡った。

「気がついたらすぐ追って下さいい。」

何してるんですか。

早くー。

早く後^{あと}を追ってー。

追ってー。

見失なっちゃー。

何してるんですかー。

早くー。
」

探偵は半狂乱になって叫び続けた。

あまりのうるたえぶりに

呆気あつけにとられて、

まずいと言っちゃた

と思ったが、

あれは明らかに違う車だ。

私は罰の悪い想いで

「でもあれは違うと思います。」

私の勘違いかんちがです。」

と言ったあと、

そのまま私は車を動かさなかった。

が探偵は

しばらくの間絶叫を繰り返した。

この人には迂闊うかつなことは言えない。

なにがなんでも

うまく仕事をやり遂とげなければ

という重圧で

ひどく緊張して

変になっているのであろうか。

うしろの十字路の信号が

幾度も赤になって、

そのたびに

車が止めにくそうにならぶ。

だいぶ迷惑になっているなと

ハラハラしているのだが、

そこから動くことは出来ない。

いい加減に出て来てくれよ。

嫌^{いや}になったな。

こんな仕事受けなければよかったよ。

とヤキモキしながら

どのくらい時間が過ぎただろうか。

営業所の裏道から抜け出て来る道に

一台の車が姿を見せて

右折するために

一時停止で止まった。

「あつ、来た。」

目の前に電光が走って

私は思わず叫んだ。

「よう。」

探偵が身を乗り出して

興奮気味に言った。

車はこちらに気付く気配もなく

右折すると

スピードを一気に上げて

またた
瞬く間に

グングン遠ざかって行く。

即座に

二人がナンバーを確認した。

間違いない。

探偵は興奮して

「早く、

あれを追ってください。」

早口で叫んだ。

私はあまりに突然のことだったので

もたついた。

気が焦って

素早く発進出来ない。

「早くして。

早く。」

探偵がパニックになって、

私もパニックになった。

前の車が先の青信号を抜けて

左折した。

青ランプが黄色になった。

「あつ、ヤバッ。」

私はアクセルを一気に吹かして

加速した。

車は前の車が通り抜けた信号に飛び込んで

黄色信号スレスレで

左折して抜けた。

「あつぶねー、

あそこで引つ掛^かってたら

アウトだぜ。」

私は額から冷や汗が

ドッと噴^ふき出した。

どこまで行くのか解^{わか}らないが、

はたしてこれから先、

信号に引つ掛からないで

あの車をつけて行くことが出来るのか、

私は信号だらけの市内に向かつて

走って行く車を追いながら

緊張が極限にまで達していた。

第21話 おばさん

前に行く車は

一リッタークラスの小柄な車だが

蠅^{はえ}が動き回るように

セカセカと落ち着きがない。

「もっとピッタリつけて下さい。

もっと。」

探偵が緊張して言った。

「大丈夫ですか。

タクシーは目立ちますから

相手に気付かれますよ。」

私がハラハラしながら言った。

「大丈夫です。」

もっとピッタリつけて。」

探偵は無茶なことを言う。

私はバレるのではないかと

気を揉みながら

前の車との距離を縮めた。
ちぢ

車はカーブを曲がった先の

郵便局の信号を左折した。

道が狭い、

このままピッタリうしろをついて行くと

相手が不審に思うだろう。

うしろを同じ方向で

ずつついて来る車がある。

怪しい。

なんか変だ。

つけられている。

気が付かないふりをして

巻こうか、

と思っているのではないかと

勝手に想像して

前の車を運転している相手の頭を

注視したが、

頭を感じから

まだ全然気付いていない様子に

少しホッとした。

しかし

どうしてこの人は

尾行されているのだろう。

浮気か、

それとも

良からぬ人達と連絡を取り合って

会社に損害を与えようとしているのを

突き止められようとしているのか。

探偵に聞いてみたい気もするが、

また半狂乱になって

喚^{わめ}きちらすのではないか

と思って聞けなかった。

私は知らずに尾行されているこの人が

何だか気の毒に感じる

と同時に

すごく悪い人にも見えてきた。

そして、

ふと

私がまだ若い高校生だった時のことを

思い出した。

たしか

夏休みに入って

しばらくたった頃のことだったと思う。

隣のおばさんが訪ねて来た。

「シンちゃん、

頼みたい。

いいです。」

日本語だが、

かなりなまっている。

スラリとした

細身の白系ロシア美人だ。

母はおばさんを

コネロさんと言っていた。

「なんでコネロさんのの。」

と母に聞いたことがあった。

おばさんが母と話しをしていて

「コネロ、コネロ」

と言ったが

何を意味しているのか

わからなかったが、

しばらく考えていて、

やっと

「紺色、紺色」
こんいろ

と言っていることに

気付いたと言うのだ。

それ以来、

母はおばさんのことを

コネロさん

と呼ぶようになったのだ。

「アレクサンドルなんとかかんとかチュウラ」

とかいう

正式には長い名前で

ロシア皇帝の一族だったが

ロシア革命で

一家は海外へ逃亡して

散り散りになってしまった。

コネロさんは満州へ逃^{のが}れて

暮らしていた。

そして

満州へ仕事に行っていた

日本人の旦那さんと

一緒になったのだ。

その後、

戦争が終わって

日本に渡って来た。

おばさんは進駐軍の基地で働いていて、

私が幼い頃、

チューインガムやチョコレートを

持って来てくれたりしていた。

しかし

その旦那さんは

いい男のところを持って来て

メチャクチャ女に手が早く、

家に帰って来なかった。

ときたま

派手な夫婦喧嘩の大声が

聞こえて来ると

旦那さんが帰って来たのだと

わかるのだ。

おばさんはその旦那さんの

後をつけて行って、

女の居所を突き止めて欲しいと

私に頼んで来たのだった。

第22話 明智小五郎

「いつ後をつけるんですか。」

私は尾行に興味を引かれて聞いた。

「いまうちの人いる。」

これから出かける。

出かけたら

私来て言う。

どこいく調べる。

わかたですか。」

貴族が毅然と^{きぜん}

命令を下すように言って、

コネロさんは家に戻って行った。

コネロさんが行った後、

私はこれから始まるであろう

追跡劇に

自分が少年探偵団の

明智小五郎になった気分で

ワクワクしながら

尾行の方法を考え始めた。

どうしたら相手に気付かれずに

ツケて行くことが出来るのだろう。

私は腕組みして

顎^{あご}をさすりながら

策^{さく}をめぐらせた。

まず

おじさんは歩いて駅まで行くはずだ。

始めからうしろについて行くと

すぐにわかってしまう。

そこで

途中から右へ曲がって

線路の側道を行けば、

その先で

おじさんが歩いて来る道と

合流する。

そうすれば

他の道から来た者が

尾行者だとは思わないはずだ。

そうだよな。

手前の道からだよな。

私は自分で思い付いたアイディアに

ひどく感心した。

んーこれだー。

これはいい。

さすが天才だ。

独り言をプツプツ言いながら、

おじさんが電車に乗ったり、

バスに乗ったりして、

最後にうしろを警戒しながら

女のアパートの部屋に入って行くところを

突き止めている妄想が

次々と湧^わいて来て、

早くおじさんが出かけないかと

ウズウズしていた。

「しんちゃん、しんちゃん、

早く早く、

うち出た。

早く。」

おばさんがバタバタ慌てて

走って来て叫んだ。

私はすっかり明智小五郎だから

落ち着き払って

悠然と靴を履^はき

玄関から路地に出た。

コネロさんは金切り声で

「早く、早く」

を連呼している。

私の家は通りから路地に入って

三軒目だった。

出て見ると、

すでに

おじさんは通りに出たあとで

姿はない。

私は小走りに

通りの角まで行つて、

家の壁越しに顔を半分出して

覗く^{のぞ}と

おじさんがだいぶ先のほうを

歩いているのが見えた。

第23話 二十面相

「よし、

気付いていないな。」

私は何食わぬ顔で

通りに出て歩き出した。

昼過ぎの日差しは

強く焼けるようだ。

おじさんは油断して

のんびり歩いている。

人通りはなく、

振り返えられたら

一発でわかってしまいそうで

何となく落ち着かない。

くず鉄屋を過ぎ、

その先の運送会社から

コールドール置場を過ぎると

十字路になる。

おじさんはそこを曲がろうとしていた。

「よし、ここからだ。」

ちょうど

運送会社の丁字路にいた私は

一瞬立ち止まると、

駅へ向かって行くおじさんを確認して、

策^{さく}を弄^{ろう}するために、

そこを右へ曲がって

走り出そうとした。

線路の側道がその先にある。

「しんちゃん、どこ行く。

そっちじゃない。

ちがーう。

そっちだめー。」

突然、

思い切り

金切り声が響き渡った。

私はビクツと固まった。

「あーっ

なんてことだ。

ダメだ。

失敗だー！。

どうして大声を出すんだよ。」

私は出鼻をくじかれ、

ポットンと

張り切ったやる気が

音を立てて落ちたのを感じた。

投げやりな気分で観念して、

しかたなく通りに戻った。

おじさんはびっくりした顔で

振り返っていたが、

次の瞬間

泳ぐように手足をバタつかせながら

右へ曲がらないで

左に向かつて

全力で走り始めた。

バス通りに行くつもりだ。

私も全力で走って、

十字路を曲がった。

おじさんは全力疾走ぜんりょくしつそうのまま、

うしろを振り向きながら笑っていた。

ざまあみろ、

ついて来れるものなら

ついて来てみる

と言っているのだろう。

「あー、怪人二十面相だ。」

私は追いかける気力も失^うせ、

へなへな力が抜けて

口をあんぐり開けたまま

立ちすくんでいた。

天才明智小五郎は

あっけなく砕け散って

冷や汗と脂汗にまみれ、

肩を落として

すごすごと

来た道を引き返すほかなかった。

尾行とはむずかしものだと、

その時

私は悟^{さと}つたのだ。

前の車は畑が広がっている細い道を

馬山市内に向かって

相変わらずセカセカと

落ち着きなく走って行く。

しばらく行くと

小さい橋がある。

それを渡ると住宅街に入った。

まだ道は狭い。^{せま}

信号が見えて来た。

青ランプだ。

車はスピードを上げた。

一気に抜けようとしているのだろう。

「もっとピッタリつけてください。

もっと。

離れないで。」

絶叫^{ぜっきょう}だ。

探偵は焦^{あせ}って、

ストレスが絶頂まで達している。

「信号変わるなよ。」

心臓はドキドキだ。

祈る気持ちで私もアクセルを踏み込んだ。

第24話 あせり

歩行者信号が点滅を始めた。

まだ抜けるには距離がある。

どうなる。

間に合うか。

バイパスの信号だから

ひっかかると前の車を見失ってしまう。

祈る気持ちで

バイパスの交差点に入った、

と同時に黄色になった。

ギリギリだ。

ホッと

胸を撫で下ろしたが、

ここから信号が多くなる。

それに

黄色で抜けることが二、三回続くと、

そのあと必ず赤で止められるのだ。

社員の車は

その先の二股^{ふたまた}を

左方向へ行つて

新幹線の高架こうかの下の道に入り、

途中から右折して

高架を潜くって左折した。

広い通りで交通量が多い。

私の車が続いて左折しようと

一時停止で止まると、

直進車両が数台

目の前を通り過ぎて

追っている車の後に

入り込む形になってしまった。

入られちゃまずいんだよな。

私はうまく追跡出来るかどうか

不安になって

イライラしてきた。

間に挟^{はさ}まっている車が邪魔だ。

社員の車は

その先の十字路の右折車線に入って

赤信号で止まった。

邪魔な車も後に続いている。

信号が変わって青になったとき、

間に入っている車が

素早く曲がってくれればいいのだが、

それが少しでももたつけば

私が曲がれなくなってしまう。

ここは何が何でも

曲がらなければならないのだ。

私は通り抜けられることを

祈りながら

信号が変わるのを待った。

青信号側が黄色に変わって

こちらの信号が青になった。

夕方の退社時間のためか

直進の車が多く

途切れない。

そのまま黄色になって

右折矢印になった。

先頭の社員の車が素早く曲がった。

続く車が意味もなく

モタモタ曲がっている。

「モタモタするな。」

早く。
」

私は心の中で怒鳴った。

頭に来る。

歩行者信号が点滅を始めている。

「早くしろ。早く。」

私は体が熱くなるほど焦^{あせ}っていた。

探偵は助手席の背もたれにしがみついて

固まっている。

次々曲が^がつ行く車が遅く感じて、

私の頭から湯気が立つほど

汗が噴き出して来て

やたら痒い。

やっと

私が曲がるところで

また黄色になった。

「行け。」

私は強引に交差点に入って

すれすれに抜けた。

探偵はホツとしたのか、

ため息をついて

後部座席の背もたれに戻った。

私の額は脂汗あぶらあせでびっしょりだ。

こんな状態がどこまで続くのか。

この先が思いやられた。

右折して

すぐ踏み切りがある。

その手前に

左へ行く道があつて

何台かの車が左折した。

これで尾行している車との間に

一台の車が挟まっている状態になって

少し追跡しやすくなった。

前の車は踏み切りを越えて

またスピードを上げた。

順調に行けそうだ。

大手のスーパーの脇を抜け

中学校を過ぎた。

尾行とは

こんなにも

ハラハラドキドキするものなのか。

探偵の仕事は大変だ。

だから目が釣り上がって

人相が悪くなるのだ。

私の目もいつのまにか釣り上がって

人相が悪くなっているのではないか

と思ったりもした。

セカセカ走っていた社員の車が

突然ウィンカーを点滅させて

止まった。

「あつ、止まりますよ。」

私は尾行している車が急に止まったので、

どうしたらいいのか判断出来ず、

そのまま

アクセルを離して止まろうとした。

私のすぐ前を走っていた車が

社員の車を追い越して

走って行った。

「止まらないで。

そのまま追い越してください。

もうちょっと

先まで行って止まってください。」

探偵はまた身を乗り出して

早口に言った。

私は慌ててアクセルを踏み込んで

社員の車を追い越すと

少し先まで行って止まった。

車が次々走って来るところに

ハザードをつけて止まっているのは

気を使って嫌なものだ。

しかし

このようなところに止まっ

怪しまれないのだろうか、

と思っ

社員は尾行されているとは

まったく気付かず、

知り合いらしい家の中へ

入って行っ

そして

そのままなかなか出て来ない。

待たされている身からすると

やたら時間が長く感じるのだ。

「何してるんだ。」

早く出て来い。」

私は焦^じれてイライラしていた。

第25話 ハラハラ

だいぶ長い時間

待たされように感じたころ、

社員が出て来た。

そして

まるで怪しむ様子もなく

車に乗り込むと

急発進するように

また走り出した。

私はその車が

横を通り抜けるのを見送ってから

後を追った。

前の車は

グングンスピードを上げて行く。

しかし

こんなわざとらしく止まっていて、

自分の車が動き出したら

後をついて来るといふのだから、

はつきり尾行とわかるだろうに

相手はなんで気づかないのだろう。

私は不思議だった。

次の押しボタンの信号は

問題なかった。

そして

コンビニを過ぎた先にある

郵便局の信号は青なのだが、

その目と鼻の先に

国道の交差点があつて、

そこから

郵便局の信号の手前まで

渋滞している。

今渋滞で止められているところの

小さい十字路の道に、

そこから

出ようとしている車が待っている。

私の二台前に社員のあるが

それは信号の先に止まっているのだ。

不意にこの信号が

赤に変わった。

まだ前の車は動きださないが、

私の車は

赤信号で止められてしまった。

細い道から車が出て

割り込んだ。

国道の信号は長い。

まだ変わらない。

私はまたハラハラしてきた。

この信号がうまく国道の信号と合うように

変わってくれればいいが、

さもないと見失ってしまう。

そう思った矢先、

国道の信号が青に変わった。

前の車が動き出して

国道の交差点を抜けて行つた。

郵便局の信号がまだ変わらない。

国道の信号は青だが

こっちの信号が青にならなければ

どうにもならない。

私はイライラが募^つっていた。

へたをすれば

ここで見失って

尾行中止になるかもしれないのだ。

前に行く社員の車が

どんどん遠ざかって行く。

どうなることかと

それを目で追っていると

信号が青になった。

国道を早く越えなくちゃ。

ギリギリでもいい。

私は祈る想いで

近づいて来る国道の信号を睨みつけ

「まだ変わるなよ。」

まだ変わるなよ。」

呪文のように繰り返しながら

スピードを上げた。

探偵は身を乗り出して

助手席の背もたれをつかんで

国道の信号を凝視している。

手に汗を握っているのだろう。

私の白い手袋の中の手も

汗が吹き出していた。

もう少しだ。

交差点の歩行者信号の

点滅が始まった。

これは何とか抜けられる。

大丈夫だ。

私は身を固くして

一気に交差点を通り抜けた。

「えーい、

ちきしょうめ。

ハラハラさせやがる。」

私はホッと息をついた。

探偵もため息をはいて

グッタリうしろの座席に

寄り掛かった。

この道を行くと

あと少しで馬山駅の南口だ。

だいぶ暗くなって来て

ライトを点灯する車が増えてきた。

鉄筋コンクリートのビルが多くなって

いろいろなネオンが光っている。

社員は駅南口信号の

手前の信号を左折した。

そこは線路の下をくぐって行く

アンダーパスの道だ。

そこをくぐると

すぐ信号があるのだが、

その信号で

車はアンダーパスの底のところまで

つながって渋滞していた。

いつのまにか

社員の車のすぐうしろに

私の車がついて止まっている。

社員がルームミラーを覗^{のぞ}けば

私と探偵の顔がわかってしまう。

大丈夫かな。

心配になって、

あえて前の車を見ないように、

どこともなく

視線をそらせながら

前の様子を窺^{うかが}っていた。

第26話 解明

しかし、

この社員はどこへ行こうと

しているのだろう。

そしてどんな悪い奴で

何について調査されているのか。

浮気なのか。

それとも会社の金を使い込んだのか。

あるいは凶悪な犯罪者か。

私は再び前に行く車の主が

何らかの罪を犯した人なのではないか

という思いから離れることが出来ず、

相変わらず釈然とし^{しゃくぜん}ないまま、

本人に尾行がばれたら

大変なことになるのではないかと、

心の中には不安と

相手に逆切れされる妄想が

広がっていた。

信号が変わってまた動き出した。

社員の車は二つ先の国道の信号を

右折する。

私もうしろにピッタリついて曲がった。

国道は車の流れが速いので

信号で止められると見失ってしまふ。

私は前の車との距離を空けないように

ついて行つた。

馬山駅入り口の信号を越えて

交番とカラオケオダッコスの信号を

過ぎたところにコンビニオーサンがあつて、

そこを左折した。

そこは来田市へ向かっている細い旧道だ。

信号を一つ過ぎて

その先が緩^{ゆる}いカーブになっているところに

もう一つのコンビニエンスストアがある。

その駐車場に前の車がサッと

入って止まった。

私は先程の要領で

そのまま通り過ぎて、

少し走らせて止まった。

交通量は少ないが

結構頻繁に車が来る。

止まっているところが

ゴミの収集場所になっていた。

翌日が大型ゴミの回収日にでもなっているのか

ソファーだとか、大きなぬいぐるみだとか、

机などのかさ張る物が置いてある。

その脇に止まっているのだ。

ゴミを捨てに来た住民が

「邪魔なところに止めてやがって」

という目で見るので居心地が良くなかった。

社員は店の中で

本の立ち読みでもしているのだろうか、

なかなか出て来ない。

私と探偵はまったくの無言で、

うしろを振り向きながら、

ただひたすら出て来るのを待っている。

首が疲れる仕事だ。

これで失敗すれば

探偵は依頼主に報酬を請求することが

出来ないだろう。

いつまでも失敗していれば生活出来ない。

探偵というのも割に合わない大変な仕事だ。

待ちくたびれるほど待った気がしたころ、

やっと社員が出て来て、

また追跡が始まった。

このまま行くと

バイパスのところに並んでいる

ホテル街のところへ入って行くが、

そこにあるどこかのホテルにでも

行くつもりなのか。

だとなると浮気だ。

私はホテルで浮気相手と

待ち合わせしているのではないかと

勝手に想像した。

いよいよホテル街が近くなつて

ネオンが暗闇に光っているのが見えて来た。

不意に前の車が右折して

その先を左折した。

他の車は一台もなく

ただ二台の車が同じ方向へ

走っているだけになってしまった。

これでもまだ気がつかないのか。

前の車はホテル街のすぐ手前に出来た

新興住宅地の中程なかほどに建っている

家と家の間にある路地に

吸い込まれるように入って消えた。

「ここで止まって。

入らなくていいです。」

探偵は言っと、

ホッと息をついてから

「ここで待って下さい。」

ちよつと降りて確認して来ます。」

暗く無愛想な雰囲気の探偵が

暗い路地の中へ入って行つた。

まわりを見回すと

十階建て位のホテルがすぐ脇にある。

そして、

その先に

立体交差でバイパスが上を通っていて

車が行き交^かっている。

それらをしばらく眺めていると

探偵が戻って来て

車に乗り込んだ。

「成功です。」

ボソツと言ってから

携帯電話をどこかにかけた。

「あつ、

成功です。

完了しました。

はい、はい、

今回は問題ありませんでした。

はい、はい、はい、

詳しいことはあとから報告します。

はい、はい、

そうです。

はい、

わかりました。」

話しのやり取りの内容はわからなかったが

依頼主への報告だったのかも知れない。

そのあと

馬山駅まで探偵を送って、

やっとその仕事は終わった。

何のための尾行だったのか

わからないままだったが、

それからだいぶ経ったある日、

朝日病院の透析患者の

青沢さんの無線を取った。

青沢さんは

六十代の髪の毛が薄くなっている

太った人だ。

このあたりでは

有名なヤクザの親分の甥おいで

鯰なますにそっくりな顔をしている。

来田市の自宅までだ。

よく喋しゃべる人で、

道中ずっと話しをしていたが、

途中で

「ホジン薬品っていうのがあるでしょう。」

突然青沢さんが言った。

「ああ、ありますね。」

私が言った。

「あそこはおかしな会社だね。

社長が社員を信じられなくて、

社員の素行^{そこう}を調べさせているんですよ。

私の知り合いがホジン薬品に勤めているんだがね。

そんなことを言っていましたよ。」

青沢さんがドスの効^きいた

力のある声で言った。

私ははっとして、

しばらく前の尾行事件のことを思い出した。

あれはホジン薬品の社長が依頼していたのか。

なるほどそうだったのか。

もしかすると

青沢さんの知り合いというのは

私が尾行したあの社員で、

尾行されていることもわかっていたのかな

とも一瞬思ったが、

私は何となく

いままで腑^ふに落ちなかった想いが

一気に解明されたように感じた。

第27話 虐待

タクシーでの営業には

ちやくちはうちしゆぎ
着地発地主義ちやくちはつちしゆぎというものがあって、

営業所が属している区域内から区域外へ

客を乗せて行くのは

当然いいのだが。

区域外で

客を乗せることが出来るのは

その場所から自分の区域内まで

帰って来るお客以外

乗せることは出来ない。

例えば

地方都市から東京都内まで行ったときに

都内で乗せられるのは

自分の区域内に帰って来るお客のみ

乗せることが出来るのだ。

しかし

都内では

銀座周辺や赤坂のように

時間によって

タクシー乗り場以外のところで

お客を乗せてはいけないところがあるので、

手を挙げたからといって

やたら乗せることは出来ないのだ。

仲間の佐原は

都内まで客を乗せて行った帰りに、

銀座で手を挙げた客を拾った。

乗せた途端に

鬼より怖い

財団法人東京タクシー近代化センターの

監視員^{かんしん}が走って来て

取り囲まれて捕まった。

乗せてはいけない時間帯だったことと

区域外のタクシーが

違法に営業をしたことによつてだ。

捕まった場合、

あとから所長とか責任者とかと一緒に

東京の近代化センターまで

出頭することになる。

そこで警察から天下った

元警察官の係官から

タクシー業務適正化特別措置法に基^{もと}づいて

厳しく調書を取られたあと

ブラックリストに載^のせられる。

そうなると

会社を辞^やめさせられて

他のタクシー会社に就職しようとしても

近代化センターの記録が

東京のすべての会社にわかってしまうので、

東京のタクシー会社には

使ってもらえなくなってしまう

ということになる。

タクシードライバーにとっては致命的だ。

しかし、

これを知っている悪質な愉快犯が

乗って来る時がある。

私の車に駅から亀島町の

ウザイル紙工までのお客が

乗って来た。

「どの道でもいいから行って下さい。」

前は線路際せんろぎわの道で

行きました。」

始めのうちは低姿勢だった。

線路際の道は家が密集していて

スピードを出せない。

車がすれ違うのに

片方が待たなければならぬほど細い。

自転車で

駅まで急いでいる人が走っている。

なにしろ

危ない道だ。

私は慎重に運転していた。

「俺は急いでいるんだよな。

急いで行ってくれるかな。」

突然客が言い出した。

「はい、

なるべく急ぎます。」

私は言ったが、

何しろ

スピードを出せる道ではない。

急ごうとしても限界がある。

対向車が来て

止まらなければならない。

「何やってんだよ。」

俺は早くしろって言ってんだよ。

わかってんのか、お前。

なめんなよ。

早く行け早く。

わざと遅く走ってんじゃないよ。

お前をクビにするのは簡単なんだぞ。

センターに電話するからな。

電話するぞ。」

立て続けにまくしたてる。

一時停止があつて

止まった。

左から

四トントラックがノロノロ走つて来た。

見ると携帯電話に夢中になっている。

何やっているんだと思いつながら

出ることも出来ず

仕方なく止まっていた。

「何やってんだよ。」

早く行けよ。

いま目で行けって言ったぞ。

何で行かねんだよ。

ばかやろう。

絶対クビにしてやるからな。

覚悟しとけよ、お前。」

トラックの運転手はこちらには気が付かないほど

携帯に気を取られていて、

行けなどと

目で合図した様子もないのだ。

まったく箸^{はし}にも棒にもかからない奴だ。

目的地に着くまで

切れ目なく怒鳴り散らしていた。

仲間の村木も

この客に同じように脅^{おど}された。

こういった輩^{やから}は

近代化センターを印籠^{いんろう}がわりに使って

タクシードライバーを虐待^{ぎゃくたい}する

暗い喜びにうち震えているのだろつ。

クレームを付ける客が

本人の名前と住所を名乗れば、

センターはドライバーを取り調べることになる。

反論するための証拠がなければ

クビになることもありうる。

こういう客の通報で

クビになったドライバーは多いことだろつ。

財団法人東京タクシー近代化センターは

平成十四年四月一日に名称が

財団法人東京タクシーセンターに変更された。

地方都市の駅のタクシー乗り場には

構内権というものがあって、

その駅の構内権のないタクシー会社のタクシーは

その乗り場にはつけることは出来ない。

構内権というのは

会社が駅につけるタクシーの台数に

応じた使用料を駅に支払って

駅構内を使わせてもらっているものだ。

うちの会社は

箱山駅と馬山駅に

構内権を持っている。

そのため

私は箱山駅の終電車が行ってしまっても、

馬山方面に行っているときは

歓楽街を控^{ひか}えている馬山駅で

客待ちをする。

飲み屋街から出て来る客がいるからだ。

第28話 屋台ラーメン

しかし

馬山駅北口は

真夜中になると人通りが途絶えて

静かになる。

ときおり

思い出したように露地から人が出て来て

タクシーに乗る。

その間は

一台の車に仲間が乗り込んで

馬鹿話に花を咲かせていた。

春から夏に

季節が変わろうとしているところで

タクシーの窓ガラスを開けて

夜風を入れていると

心地良い外気が入って来る。

そろそろ

真夜中の三時になろうかという頃だ。

「ガガーン、ガゴーン、

ガガーン、ガゴーン」

「何の音だ。」

私はとつさに

どこから響いて来るのか

思わず見回した。

「おいおい、

頭いっちゃってるよ。

ああいうところで食いたくねえな。」

助手席に座っている上松が

前の様子を見ながら言った。

後ろの座席にいる梨原と高本も

身を乗り出して来た。

「うわー、

だいぶいかれてる。」

「ひでー。

どうかしてる。」

二人も口々に言って

薄気味悪そうに見ていた。

ロータリーの歩道に

屋台の軽トラを乗り上げて商売をしている

ラーメン屋が

何を思ったか

狂ったように積んであるガスボンベを

サンドバッグがわりに

素手で殴^{なぐ}っている。

四十代くらいの店主は

空手でもやっているのだろう。

全身の筋肉が盛り上がっていて

太くがっしりした腕の拳^{こぶし}が

ボンベに鋭く突き刺さる。

そのたびに

衝撃で

ボンベが荷台の上で激しく踊り上がった。

酔った客にナメられないように、

自分の強さを示そうとしているのだろうか、

こんなのに殴られたら

酔客はひとたまりもないだろう。

タクシードライバーは

誰もそこで食べる者はいなかった。

そのうち、

そのラーメン屋は姿を消した。

凶暴ラーメンを敬遠して

客が寄り付かなくなったのかも知れない。

それから半年以上

ラーメン屋は現れなかったが、

ある日の夜、

突然ラーメン屋が

まったく同じ場所に現れた。

しかし

ラーメンを売っている店主は

あの凶暴ラーメンの店主ではなかった。

以前の店主と比べると

紳士的な顔をした人物だ。

別の人がラーメン屋を始めたんだなと

私は思った。

終電車が終わって

例の如く

私の車にいつものメンバーが乗り込んで来た。

そして

そのうちの一人の梨原が

ラーメン屋を見て即座に

「あれは完璧やバイですよ。」

気をつけて下さい。」

と言った。

第29話 駅前

完璧かんぺきやバイって

何だろう。

私は湯気が立っている軽トラックの屋台で

黙々（もくもく）と

ラーメンを作っている

店主の様子を盗み見た。

髪は分けてはいないが

前髪を横に流して

真面目まじめな普通の髪型だ。

顔もどうつてこともない

やや細面ほそおもてで

どちらかといえば

いい男の部類ぶるいに入るだろう。

体つきは大きくはなく、

ずんぐりむっくり

といった感じだ。

それほど強そうには見えない。

この人が

どうして危険人物なんだろう。

私は半信半疑だった。

「あの人が危あぶないんですか。」

梨原が

丁寧ていねいな喋しゃべり方をするので

私もタメグチを避さけて尋たずねた。

「あれはムシヨから出所してきたばかりの

凶田組の幹部ですよ。」

「えっ、

幹部みずからラーメン屋ですか。」

私は驚いたが、

何だか可笑しくて

笑ってしまった。

梨原も笑った。

「凶田組のナンバーツーで

篠川虎次っていう人です。」

「へえーっ、

ナンバーツーが屋台のラーメン作りなんだ。

やっぱりシノギが厳しくて

ヤクザも堅気の仕事をしなくちゃ

食っていけないようになったんですかね。」

「まあ、そうかも知れないです。」

梨原はタクシードライバーになる前は

調理師をしていたが、

どういう訳か

ヤクザの親分が経営している

高級クラブの調理場を任^{まか}されていた

ということもあって、

ヤクザにはやたら詳^{くわ}しい。

本人自身も

恐喝^{きょく}事件^{じけん}でバクられ、

拘置所こうしじょに送られたことがある。

ただ

梨原の場合は自分のためではなく、

知り合いの女性が

男に脅迫きょうはくされていたのを

持ち前の正義感で、

長いヤスリをグラインダーで削けずった

自作の短刀を持ち出して

ヤクザ顔負けの脅おどしをかけたのだ。

しかし、

裁判所のほうも

事情を考慮こうりょしてか、

執行猶予付きになったようだ。

その日から

ラーメン屋の篠川は

毎日夕方から決まった時間に出て来て

夜中の三時頃まで

キッチリ仕事をしていた。

さすが幹部だ。

若い者の鏡であることを

意識しているのだろうか、

それとも

幹部としては

ぶざまな様子は見せられないためか、

不真面目な態度は微塵^{みじん}もなく

無言で

ひたすらラーメンを作って売っていた。

特急も止まる大きな馬山駅は

周辺に繁華街も控^{ひか}えていて

行き来する人の数も多い。

その中に、

やはり無言で

よたよたしながら

段ボールの箱を探し回っている

痩^{やせ}せた老人がいる。

七十代位に見えるが、

そんなにいつていないのかも知れない。

パーキンソン病なのか

歩き方がカタツムリのように遅く、

なかなか前に進めない。

風呂にも入っていないのだろう。

着ている服は

垢^{あか}で黒光りするほど

汚^{よご}れている。

目つきは鋭く、

人を寄せ付けず、

前を睨^{にら}んで、

口をへの子に曲げていて

人相はよくない。

「あれは太谷っていう

武闘派のヤクザだった人ですよ。

若い時は暴れまくっていたから

恐れられていたんですがね。

倒れてあんなったら

組にも見放されて、

誰にも相手にされなくなっちゃったんです。」

梨原が言った。

私はヤクザの成^なれの果^はてを

見た気がした。

年金も掛けていないだろうし、

住むところも追い出され、

仕事もなく、

ホームレスになるしかなかったのだらう。

しかし

堅気で年金を掛けてあつたとしても

共済年金や厚生年金なら、

なんとかくらしで行けるが、

四十^か年掛けても

月に六万円くらいしか支給されない

国民年金では

金を産む資産もなく、

働くところもなければ

無年金のヤクザの心配どころか、

自分の心配をしなければならないのだが、

それはさておき、

ここで屋台のラーメンを作っている、

あの篠川も

人生の末路はどうなっていくのだろう。

暴力に頼って

金を手に入れることが出来ても、

体を壊したり、

歳を取って力がなくなった時には、

この太谷のように

どうすることも

出来なくなってしまうのではないだろうか。

駅周辺の週末はさすがに人が多い。

ラーメン屋も客の対応に追われていた。

近くに大山大学があることもあって、

その学生も多く遊びに来ていた。

しかし

若者達は羽目を外して

しばしば問題を起こす。

酔った学生がラーメン屋に立ち寄った。

第30話 学生

どこかで

呑^のんで来たのだろう。

だいぶ酔っている。

一見ヤクザには見えない篠川を

学生はナメたのか。

力もないくせに偉そうで

横柄^{おうへい}な態度のいやなやつ、

と感じてしまったのか。

組のナンバーツーともなれば

組長の代行を務める位置にいる

幹部だ。

まわりから一目置かれている存在だ。

やはり

偉そうな態度は

どうしても出てしまうのだろう。

そのために

腰の低い接客は出来ないのかも知れない。

ラーメンを頼んだ学生は

店主の素人臭い

おぼつかない手つきのくせに

横柄な態度にイラついたのだろう。

「なんだよ。」

「ざけんなよ。」

学生は仲間がいることで

調子づいていた。

酒癖がよくないのか、

あるいは冗談半分だったのか。

軽トラのタイヤを

コツンコツン

蹴^{けと}飛ばした。

篠川は無言でラーメンを作っている。

すると

突然、

三、四人の男達が両脇から

その学生の腕を取って

「お兄さん、

ちょっとそこまで付き合ってもらえますかね。」

と言ったかと思うと

人けのない薄暗いビルの裏側へ

引っぱって行った。

裏側にまわった途端、

男達が豹変^{ひょうへん}した。

「おらー、

てめー、

店に因縁^{いんえん}つける気かー。」

男の一人が学生の腹にパンチをくらわせた。

学生が

「うっ

と呻^{うめ}いて

前屈まえこじみになつたところへ、

かさにかかった男達が

「なるー、

ふざけんじゃねえぞ。

ばかやろー。

このやろー。」

口々に罵ののしりながら

次々膝蹴ひざおこりを見舞った。

学生はヘドをはいて

その場につづくまつた。

第31話 新入社員

その事件以後、

大山大学は

そのラーメン屋に

学生が立ち寄ることを禁止した。

それからしばらくたった後、

五十代位で背が低く、

痩^やせて

髪の毛がやや薄くなりかかっている

暗い雰囲気

しもつぐもとあ
下次素男が

入社して来た。

下次はロンタコスという

大手企業の係長だったが、

リストラされて

タクシー乗務員になった。

妻と子供二人。

子供は小学生と中学生だ。

結婚が遅かったのだろう。

家のローンがまだ残っている。

タクシーは慣れないと

非常に神経をすり減らすものだ。

道はわからない。

客から怒鳴られる。

渋滞の中でも

客から降りる指示があれば

他車の迷惑もかえり見ず

止めなければならない。

そんなとき

一万円でも出されて

釣銭を数えなければならない

なんてことになる

パニックになる。

一日中^{あじうあせ}脂汗にまみれるのだ。

ベテランドライバーの助手席に乗って

研修する期間が済んで、

一人で

タクシーに乗務するようになった下次は

馬山駅付けの勤務になった。

馬山駅はタクシーが多い。

タクシープールは

横に四台、

縦に十台位列んで

詰め込まれ、

入れない車がプールを取り巻くようにして

列^{なら}んで待っている。

特急も止まって

乗降客が多い馬山駅だが、

タクシーの台数が多過ぎて

なかなか順番が回って来ない。

プールに入ってから出るまでに

時間がかかる。

下次は数日後

下痢が止まらなくなった。

第32話 待った無し

それからの下次は

リストラで傷ついた

心の痛みを抱えながら、

未経験のタクシー乗務を

しなければならなくなった。

神経は使う。

道がわからない。

客に怒鳴られる。

家のローンは支払わなければならない。

子供達^{さん}の教育費はかかる。

うんこは待った無しで

襲^{さん}って来る。

トイレを探してさ迷う。

惨^{さん}憐^{たん}たる状況の中で

仕事をしなければならなくなった。

特に

昼間の馬山駅は

タクシーの台数が多いために

客待ちの時間が長すぎて

なかなか順番が回って来ない。

一時間半や二時間待ちは

当たり前のようになっている。

その日、

下次は腹の具合を危^{あや}ぶみながらも、

とりあえず

便意^{べんい}はなかったので

馬山駅のタクシープールへ入った。

三十分近くかかって

プールの中程あたりまで移動した頃、

急に腹が痛くなった。

「うっ、

来たー。

まいっとな。

どうしよう。」

下次は不安にかられて

体からスーッと

血の気が引いて

脂汗が噴^ふきだすのを感じた。

トイレはロータリーの一番はずれにある。

タクシープールから見ると

うしろのほうになる。

しかし

行こうと思っても、

そういつときに限って

意地悪く客が来て

タクシープールの中が動いて

前に詰めなければなくなる。

動くときに乗っていないければ

その列だけ

後の車が前に移動出来ず

全体に迷惑がかかってしまう。

ましてや

新人が勝手なことをしていれば

古株から怒鳴られるのは明らかだ。

いつ動いてもいいように

車を離れるわけにはいかない。

「よわったな。

よわったな。

間に合わないよ。

どうしよう。」

タクシープールの真ん中では

前後の車の台数が多過ぎるため

移動してもらって

外へ出させてもらうわけにはいかなかった。

「前が空いたら^あ

乗り場に着けないで

そのままトイレに行こう。」

下次はめまいを感じながら

必死で堪えた^こ。

もう生きた心地がしない。

神様ー。

仏様ー。

助けてくださーい。

思わず心の中で叫んでいた。

祈りが通じたのか、

前の車が移動して、

すぐさま

下次はプールを抜け出した。

そのまま

一方通行のロータリーを右方向へ走って

トイレの所まで行った。

しかし

迎えの車が列ならんでいて

車を止める場所がない。

我慢出来ない。

ふと

見ると

ラーメン屋台の前あたりに

ギリギリ何とか止められそうなスペースが

空いているのを見つけて

バックでその隙間に車を入れた。

気がせて上ずっている。

「ゴツ」

軽く何かに当たったような

鈍い音がした。

ハッ

として少し前に出し、

慌てて車を降りると

トイレに向かって走り出した。

「待てゴラー。」

他人の車にぶつけておいて

どこ行くんだ。

てめー。」

下次はビクッと振り返った。

第33話 限界

振り向いた下次の目に

雰囲気がよくない

バンチパーマの若い男が

凄^{すご}みをきかせて

こちらに向かって来るのが見えた。

下次は

蛇に睨^{にら}まれたネズミのように

固まった。

気付くと

ほかにも

丸刈りの不気味な若い二人の男が

近づいて来る。

「見ろ。」

ここにぶつかってるじゃねえか。

どうしてくれるんだ。」

パンチパーマが

微^{かす}かな傷かどうか分からないところを

指さしながら凄^{すこ}みをきかせて言った。

ほかの二人も口々に

「こんなに傷つけて逃げる気か。」

「会社に連絡して、すぐ社長を呼べ。」

「早くしろ。」

いつのまにか

ラーメン屋の篠川も見に来ていた。

その若い連中は

組長代行の篠川がいるせいか、

ここぞとばかり、

かきにかかって騒ぎ立てた。

普段は

目立たないように

篠川をガードしている組員なのだろうが、

ここは金に出来るチャンスが

転がり込んで来たのだ。

組員と篠川は以心伝心^{いしんでんしん}、

タクシー会社から金を取れるように

もって行こうと考えていた。

下次の便意は絶頂に達していたが、

恐ろしくて

言いなりになるしかなかった。

しかたなく

無線で本社に車をぶつけてしまったことを告げた。

「怪我人はいいますか。」

オペレーター（無線番）がたずねた。

下次は脱糞直前の

身震いとめまいで

返事も上の空になっていた。

「怪我人はいません。」

「そうですか。」

警察はまだですね。

こちらから警察に連絡します。

北口のロータリーですね。」

こういうときにオペレーターは頼りになる。

無線で報告したあと、

意を決して、

トイレへ行かせてもらおうと

車の外へ出たが、

すでに

歩けば噴出してしまうようになっていて、

トイレまで行くことが出来ないほどだ。

「あのー。」

と言いかけた途端^{とたん}

「あーっ」

急激な圧力が

肛門^{こうもん}に加わったかと思うと

「にゅるっ」

とはみ出てしまった。

慌て^{あわ}てつま先立つように

股間^{こかん}をすぼめ、

海老^{えび}反ったが、

張りつめていたものが

いっぺんに切れてしまった。

「びちびちびちー」

止めるまもなく

一気に噴き出して来るものを

どうすることも出来ず、

体の力も抜けて、

その場に立ちすくんでしまった。

「あっちちちち」

熱湯のように

熱くて緩い^{ゆる}ものが

ズボンの中を雪崩^{なだれ}をうって流れ落ちる。

そして

それがアスファルトの上に

ボタボタ落ちた。

「ん、

何だ。」

組員が下次を見た。

「あーっ、

こいつウンコ出てますよ。」

目^め敏^{びん}く見つけた一人が指さした。

「おいおいおい、

テメー何やってんだ。

店の前だぞ。」

「こりゃあ営業妨害だ。」

他の二人も口々に下次を責^せめ立てた。

下次は恥^はずかしさと惨^{みじ}めさで、

いても立つてもいられなかった。

連絡を受けて

駅前交番から警官が数名かけつけて来た。

二人の丸刈りの組員が

トイレに走って行くと

バケツに水を入れ、

柄付きタワシを持って来て、

道路の上に落ちているウンコを洗い流し始めた。

ヤクザ見習いするとき

便所掃除は

嫌になるほどさせられたのが

身についているのだろう。

ウンコを見ると

無意識に体が動いてしまうのかも知れない。

「十六号車どうぞ。」

十六号車どうぞ。

十六号車の下次さんかんと感度ないですか。」

タクシー無線が下次を呼んだ。

箱山駅に列んでいる乗務員には

馬山駅で何が起こっているのかわからない。

事故ったらしい無線がさつき入って来たが、

異常事態でも発生したのか。

何で返事しないんだ。

いったい何してるんだ。

事情を知らない乗務員達は

いつまでたっても無線に^{おしやう}応答しない下次に

いらだっていた。

まだ無線は下次を呼び出している。

オペレーターの声も

応答がないことにイライラして、

呼び出しの声が大きくなっていく。

みんなのイライラがピークになったころ、

やっと応答があった。

「下次さん、今どこにいるんですか。」

お巡りさんが事情聴取しようとしたら

いなくなっちゃったって

言ってるんですけど、

どこにいるんですか。」

「えっ、

何ですか。」

「何、

仕事してるー?」

「そんなことしてる場合じゃないでしょ。」

「だめですよ。

すぐ戻^{もど}って、

ちゃんと事情聴取受けて下さい。」

タクシー全車には

オペレーターの声は聞こえるが

下次の無線は本社にしか聞こえない。

そのため

乗務員達はオペレーターの声だけで

状況を想像するしかないのだが、

何かただならぬ事が

起こっているらしい様子は感じられた。

第34話 現場検証

下次のプライドは

ズタズタになっていた。

大学を出て大会社に入って

係長になれたと思ったら、

リストラされ、

いま公衆の面前で

ヤクザに脅^{おそ}され、

あろうことが、

脱糞までしてしまったのだ。

こんな恥ずかしいことはなかった。

全員が下次の情けない姿に驚いて、

好奇の目で見ている。

まるで見世物だ。

消えて無くなりたいたい気持ちで、

この場から逃げたかった。

お巡りさんが来たし、

見ればほとんど傷ついてはいないのだから、

居なくても大丈夫だろう。

こんなことではいられない。

俺は稼^{かせ}がなくちゃならないんだ。

下次は自分の都合のいいように思い込んで、

勝手に車へ乗り込んだ。

「あうつ、気持ちわるーい。」

思わず身震^{みふる}いして

悲鳴を上げそうになった。

パンツの中が冷たくなって

グチヨグチヨしている。

その上に座ることになってしまった。

それに臭^{にお}いもひどい。

まるで便所だ。

これで客を乗せるつもりなのか。

しかしモタモタしてはいられない。

下次はそのまま運転して

ロータリーから出て行ってしまった。

どういう訳か

全員の隙すきをついていた。

それぞれが他の事に気を取られていたのだろう。

皆が気づいた時は

すでにそこにはいなかった。

警官は仕方なく本社に電話をかけてきた。

そのとき下次はあてもなく車を走らせていた。

駅につければ物笑いの種にされて

恥をさらすことになるだろう。

とりあえず走っていれば客が手を上げるかも知れない。

しかしそれにしても悔^くしかった。

「あれは俺が悪い訳じゃない。

車に傷もついていないのに

トイレに行かせてくれなかったあいつが悪い。

あんなところへ用もないのに

車なんか止めやがって、

あいつさえいなければ

漏^もらすこともなかったんだ。

チキシヨウ。

俺が調べられるんじゃないくて、

あいつが調べられるべきだろう。

あいつらが俺を脅^{おど}したんだから。
「

相手の理不^{りふ}尽^{じん}さに

憤^{ふん}慨^{がい}しながら、

あれこれ頭の中を

思いがかけ巡^{めぐ}っていた。

ふと

先ほどから何か騒々（そうぞう）しい

と思っていたものが

自分呼び出している無線だったことに

やっと気付いた。

それほど物思いに耽^{ふけ}っていたのだろう。

何を言われるのかと無線を取った。

応答するのもおっくうだったし、

他人^{ひと}と話しもしたくなかったが、

「どこにいるんですか。」

と聞かれてつい

「仕事してます。」

と言ってしまった。

予想外の返答に驚いたオペレーターに促^{うなが}されて、

渋々（しぶしぶ）車をロータリーに戻し、

現場検証に立ち会った。

そのあと下次は仕事を打ち切って

本社に戻るように無線で念を押され、

仕方なく会社へ帰って来た。

ズボンの中の気持ち悪さで、

足を引きずるように戻って来た下次に

事務所は大騒ぎになった。

臭^{くさ}い。

すごく臭い。

いったいどうしたんだ。

漏^もらしてるのか。

事故現場から勝手に立ち去ったことだけでも

会社としては問題になっていたが、

脱糞したまま

構かまわず仕事を続けようとした、

そのまともではない神経を

疑うわれてしまった。

そして

まだ見習い期間中で

正社員ではなかったために、

そのまま我社では採用出来ない

と断そつこく定されて即刻解雇となつてしまった。

タクシー乗務員達の情報伝達速度は速い。

事故の報告の後には

もうすでに他の乗務員から

凶田組の幹部が係^かわっていることが

会社に知らされていた。

翌日会社の事務所に一人の男が訪ねて来た。

第35話 示談

やっぱり来たか。

事務所に緊張が走った。

全員が男の出方をでかた

窺うかがった。

常務が対応に出ると

男はおもむろに

名刺を差し出した。

名刺には

「米麦会 凶田組 組長代行 篠川虎次」

と書かれてあった。

凶田組ナンバーツーだ。

常務は差し出された名刺を見ながら

丁重^{ていちょう}に

「あー、

どのようなご用件でしょうか。」

低姿勢だが

何食わぬ顔で尋ね^{たず}た。

「昨日の馬山駅の件なんだがね。」

ぶしつけに篠川が切り出した。

「じつはお宅の乗務員がぶつけたのは

うちの若い者の車だったんだよ。

かわいそうに

大事にしている車をぶつけられて

何の挨拶もなしで、

黙って行っちゃうんだから、

どう考えても

筋が通らねえと思うんだがね。

そのあとうちの屋台の前で糞くそだ。

営業出来ないよな。

うちのほうとしてはそれについても

補償してもらいたい

と思っているんだがね。

ラーメン食いたいと思ったって

糞ひつてあつたら誰も寄り付かねえよね。

糞のほうはうちの若いのに掃除させておいたが、

ほんらいならうちが掃除することではないんだ。

しかし、

お宅は社員にどういう教育しているんだい。

警官が事情聞こうとしたら

逃げちゃってないんだから、

どうしようもないな。

教育がなってねえんじゃねえんかい。」

篠川は静かだが

油断のならない目をして言った。

「ああ、そうでしたか。」

ご迷惑をおかけしたうえ、

いろいろお世話になり、

申し訳ございませんでした。」

常務は腰を低くして頭を下げた。

「まあ

警察のほうでも示談で済むなら、

そのようにしたらどうかと言つもので、

それで寄らしてもらつたわけなんだがね。

うちの若いもんは

あの車を大事にしてるんだ。

誰だつて気に入っている車を

ぶつけられればただじゃ済まねえよな。」

篠川は威圧するように言った。

これは困つたな。

どうしようか。

対応を間違えると

馬山駅のうちの営業車に嫌がらせをされる。

彼らは法律に触れないように

仕事の邪魔をすることはおてのものだ。

よくミカジメ料などを払わなかったり、

あるいは借金の返済を請け負う

「切り取り」

などで狙^{ねら}われた飲食店だと

開店と同時に押しかけて

ボックス席すべてに

一人づつ座って、

ビールを一本だけ注文する。

そして、

その一本を一日かけて

ちびりちびり飲み、

腹が減ると

その店に出前をとらせて

閉店までねばる。

これを毎日やるのだ。

他の客が入って来ても

店内の異様な雰囲気

寄り付かなくなってしまふ。

結局

最後は店が折れて金を払うか、

あくまでも払わないで

店が潰れるか

どちらかになってしまふ。

警察に訴えても

客としてビールを注文し、

金も払って店の中にいるわけで、

明らかに脅迫しているという

決め手がないために

取り締まるわけにはいかない。

タクシーも同じだ。

うちの車が駅先頭になるのを待っていて、

乗り込んで来て

ワンメーターの仕事をさせ、

わざとわからないような場所を指示して

ドライバーに間違わせて、いねれば

金を払わずに邪魔をすることが出来る。

警察に訴えても

客として乗っているわけだから、

警察としては取り締まりようがないのだ。

常務は椅子を篠川にすすめると

「こちらで少々お待ち願えますでしょうか。

すぐに参りますので。」

と言が残して

奥の専務の部屋へ入って行ったが、

専務と相談していたのだろっつ。

しばらくすると

封筒を持って出て来た。

「お待たせしました。

示談についてはなんですが、

これで手を打っていただけないでしょうか。」

常務はこれでごねられたらどうしようか

と思いながら

膨^{ふく}らんだ封筒を篠川に手渡した。

篠川は封筒の中を覗^{のぞ}き込んで

「まあ、いいか。

社員の教育はもっとまじめにやらないとだめだな。」

と言うと素直に帰って行った。

篠川としても

ほとんど傷らしいものもない傷で

横車を押すのは

気が引けていたのかも知れない。

しかし、

下次はあれからどうなってしまったのだろうか。

自分に合う仕事が見つかっただろうか。

ひとことながら気にかかっている。

第36話 強盗

馬山駅前に他県のタクシーが止まった。

乗客は若い女が二人。

その運転手の首に

刃をいっばいに出した

カッターナイフが押し付けられていた。

「金をだせ。」

運転手のうしろに座っている女が

カッターナイフを突き付けたまま言った。

「何してるんだ。」

ばかなことはよせ。」

運転手は言いながら

その手を払い除けようと抵抗した。

そのはずみで

首筋に押し当てられていたカッターナイフが

動いてしまった。

運転手は痛みを感じたが

夢中でドアを開け、

逃げ出した二人を追いかけて、

そのうちの一人を捕まえた。

見回すと駅前に変番があつた。

そこへ捕まえた女を突き出した。

運転手の首からは

血が噴き出していた。

すぐに

救急車で病院へ搬送はんそうされたが、

カッターナイフが

あと一センチ深く入っていたら

頸動脈けいどうみやくが切れていたところだった。

捕まえた女の自供で

逃げたもう一人も逮捕された。

まだ未成年の少女だった。

隣の県のはずれのあたりから

来ているので

一万三千円位は料金が出ていただろう。

運賃を踏み倒して

金を奪うつもりだったが

運転手が気丈^{きじょう}だったために

失敗した。

それからしばらくの間、

物騒ぶっそうな話しは聞こえて来なかったが、

馬山駅事件のほとぼりが冷めたころ、

山の入口の森井駅につけている

森井タクシーの乗務員が強盗にやられた。

ナイフを突き付けられて

売上金と釣銭つりせんを

持って行かれた。

そして数日後、

こんどは浅山駅の

浅山タクシーの乗務員が

ナイフを突き付けられて

売上金と釣銭をやられた。

「なんだよ。」

強盗がだんだん近づいて来るじゃねえか。」

「浅山がやられたんじゃ、

この次は箱山だぞ。」

「この中の誰かがやられるんかい。」

箱山駅のタクシー乗務員達は

人ごとのように面白がっていた。

自分だけは大丈夫だと思っているのだろう。

あまり深刻しんくつには

とらえていないように感じられた。

しかし、

人によってはマイナスドライバーを

ドアのポケットに入れていたり、

自転車のチェーンを

束たばねて

手ぬぐいで包くるんだ物を

座席の横に忍しのばせているのもいる。

ひどいになると

折りたたみの

ノコギリやキリを

ドアのポケットに入れている。

いざとなったら、

そのノコギリで

相手の首に切りつけるのだろう。

そうになると強盗のほうも命がけになる。

第37話 柔道二段

みんな警戒していたが

緊張はいつまでも続かない。

強盗もこっちまでは来ないのかな

と思って安心していた矢先、

馬山駅につけている

ダイオータクシーの赤田が

深夜、桶川まで客を乗せて行った。

支払いのときに

振り向いたところ、

突然

顔に催涙スプレーを噴きかけられた。

赤田は元警察官で、

体重百キロ越えの巨漢、

柔道二段の腕前だが、

体重があり過ぎて

機敏に身動き出来ず、

痛む目を押さえて

「あただだっ」

と言ってる間に

強盗は売上金を奪って

悠々と逃走した。

強盗は始めから

太って動作の鈍い赤田を

狙^{ねら}って乗り込んで来たのだろう。

柔道二段が何にもならなかった。

箱山駅の乗務員達は

次は俺達の誰かがやられるんじゃないか

と思っていたのだが、

ひと駅通り越して

馬山駅へ行ってしまったので

内心ホッとしていた。

結局

犯人はわからず仕舞い^{しま}で

検挙^{けんきょ}されなかった。

それからしばらくの間

平穏な日々が続いた。

強盗があつたことの記憶が薄れ始めたころ、

また森井駅の

森井タクシーが強盗にやられた。

今度は拳銃だ。

「金を出せ。」

出さないと打ち殺すぞ。」

拳銃が本物が偽物にせものかわからない。

改造銃かも知れない。

しかし、

うっかり抵抗出来ない。

そして、

そのまま売上金を持って行かれた。

そしてどういいうわけか、

また順番通りに

浅山駅の

浅山タクシーが拳銃強盗でやられた。

次は順番からすれば箱山駅だ。

また箱山駅の乗務員達が騒いでいた。

「拳銃じゃどうやってもかなわないな。」

「偽物ってこともあるだろう。」

「いや、

それが始めからわかっていればいいよ。

わからないんだから。

へたに抵抗して本物だったらやばいぞ。」

「やっぱり」

拳銃じゃ諦めるしかないか。」

私も武道は少しかじったが、

拳銃じゃどうやっても

かなわないなと思っていた。

大山倍達あたりの達人なら

何とか活路は見い出せるのだろうか

なまびょうほう
生兵法は

おおけが
大怪我のもとだ。

抵抗しないほうがいいだろう。

とりあえず

乗って来る客の様子や

気配を感じ取るしか

方法がないのだ。

怪^{あや}しいと思っても

「お客さん、

強盗するつもりじゃないでしょうね。」

とは聞けないのだ。

へたをすれば

名誉毀損めいよきそんにもなりかねない。

誰がやられるのだろうと

思っていたが、

また箱山駅を通り越して

馬山駅、

ダイオータクシー、

元警察官、

柔道二段の赤田が

馬山市内で

拳銃を突き付けられて

売上金を持って行かれた。

同じ人が二度も

強盗にやられるというのも珍しい。

これは

前回の連続強盗事件の犯人と

同一人物ではないかと思われるが、

いまだに

犯人は捕まっていない。

そして

その後タクシー強盗は起こらなくなった。

しかし

そのかわりに

今度はコンビニ強盗が連続しました。

箱山駅周辺のコンビニエンスストアが

軒並みやられた。

私がいつも行っている

サイコーストアーもやられた。

それは

地方都市にチェーン展開している

小規模のコンビニだ。

いつも七十代のおばあさんが

店番している。

その日も

深夜まで

おばあさんが店番していた。

強盗はおばあさんが一人になるのを

待っていたのだろう。

客が途切れたところを

見計^{みはか}らって

店に押し込んだ。

ナイフを突き付けられたおばあさんは

抵抗出来ないまま

売上金を取られてしまった。

これも犯人は悠々と逃走し、

見つかっていない。

それ以来

その店は深夜営業をやめた。

強盗に入られたあとも

私はその店で買い物をして

おばあさんとよく話をしていたが、

そのおばあさんには一つだけ困ったことがあった。

第38話 ハーツして

その日は

三勤一休さんきんいつきゅうの

三日目で翌日が休みだった。

三勤一休とは

三日出勤して一日休みの

ローテーションのことだ。

これはタクシー会社によって

いろいろ異ことなっている。

一勤一休のところもあれば、

二勤一休、

四勤一休や

五勤二休、のところもある。

仕事も三日目になると

心身共に疲れがたまるので、

呑^のめない酒を

少しひっかけてから寝ることにして、

サイコーストアーへ寄った。

商品棚から

お目当ての一番安い

ブレンダーを手にとると

レジへ向かった。

「いらっしやいませ。」

おばあさんが

にこやかに私を見た。

その途端

レジの脇に置いてあった

パンを掴むと、

うしろの電子レンジに

ほうり込んだ。

それからおもむろに

レジを打った。

何をしているんだろうと

怪訝けげんに思いながらも

話しかけた。

「強盗にやられたんだって？」

大変だったね。」

「そうなの。」

恐こわいから

お店を遅くまで開けないことにしたのよ。

夜中じゃ

男の人がいなくなっちゃって

私一人でしょ。

だから

強盗に狙われやすいのね。」

と言いながら

電子レンジで

チンが終わったパンを

レジ袋へ入れたブレンダーの横へ

間髪^{かんぱつ}を入れずに

押し込んだ。

「あっ」

ちらつと

見えたパンだが、

私が間違っても

絶対買うことがない

パン生地が変に甘い、

ツナオニオンマヨネーズだ。

「それじゃないよー。」

私は叫びたかったが

断^{ことわ}ることも出来ず、

しかたなく

袋を受け取って

営業車に戻った。

パンの袋を見ると

前日に消費期限が切れている。

おばあさんは親切のつもりなのか、

もったいながりなのか、

よくわからないが

貰^{もら}ったほうは

まるで

自分が残飯ざんぱんを処分する

廃棄物処理機はいきぶつしゆりきのように

扱あつかわれているようで

いい気持ちはしなかった。

でも

たぶん

親切心からなのだろう。

それとも

私のことが好きなのかも知れない。

私に惚ほれているのかな。

などと自惚うぬほれながら

車を走らせた。

そして

不意に

以前夜中の二時過ぎに、

いつも行く旧道のファミリーマートに

立ち寄ったときのことを

思い出した。

その時も

寝酒を買おうと

店に立ち寄った。

店内に男の客がいて、

品物を選んでいたが

店番のおばさんがいない。

「おかしいな。

客がいるのに

おばちゃんがないのは

どうなっているんだ。

無用心^{ぶよっしん}じゃないか。」

と思いながら

ブレンダーの置いてある

棚^{たな}のところまで行くと

入口のドアが開いて

おばさんが入って来た。

すると

店にいた客が

品物を持ってレジに行き、

支払いを済ませて出て行った。

私が安いブレンダーを持って

レジに行くと

「ごめんなさいね。」

怪しい人が入って来て、

恐いから店を出て隠れていたのよ。

私一人ですよ。

何されるかわからないし、

誰か来るのを待っていたの。

一人でいると恐いわよ。」

おばさんは不安そうに言った。

いま出て行った客が

恐かったのかと思ったが、

怪しい人に疑われた

あの客を気の毒に思った。

それにしても、

あのおばちゃんも

俺のことが好きなのかな。

いつ行っても

話しかけてくるんだ。

「色男、

金も力もなかりけり」か。

だいたい

女にちょっとうまいと言われると

すぐいい気になる

救いようのないところが

私にはある。

それでいつも

痛い目に会わされているのだが

懲^こりないのだ。

生来^{せいらい}の女好きが

災^{わざ}いしているのだろう。

あれこれ思い出しているうち、

本社に着いた。

日計と営業明細を印刷し、

日報を書いて

メーターをクリアした。

「さて帰るぞ」

と思ったが、

調理パンをどうしよう。

消費期限過ぎてるし、

あしたまでもたないだろう。

「そうだ。

無線番の小松ちゃんに

食べさせよう。

ちょうど

お腹も空すいているころだろう。」

私は食べ物を捨てると

罰ばいが当たると

教えられて育ったため、

捨てることに抵抗がある。

小松に食べてもらえれば

私の罰は免^{まぬ}れるだろう。

自分に都合のいいように考えた。

自分さえ良ければいい

ということになるのだろう。

「お疲れさま。

パン食べるかい。」

事務所に入って行くと

私はやさしく小松にパンを勧^{すす}めた。

「いないよ。

酒がまずくなるから。」

木で鼻をかむように

速攻で拒否され、

仕方なく諦めて^{あきら}

自分で食べることにした。

どうも

美味しくない^{おい}。

なんか

生臭い^{なまぐさ}ような

気もしないではなかったが、

無理をして、

なんとか食べ終えた。

家までは

大橋を越えて

四十分位かかる。

本社を出て

国道の信号を突っ切って、

その先の旧道を左折した。

狭い道を浅山方向へ行くと

市団地の入口あたりで

広くなっている。

そこに差し掛かったとき、

突然

暗がりの中に

赤い棒が点滅しながら

振られているのが見えた。

見ると

何台かの車が止めてられて

五、六人の警官が

手分けして検問していた。

私は指示されるまま

車を止めた。

すると

一人の若い警官が寄って来た。

私は窓を開けた。

「すみせん。

お急ぎのところ

お手数をおかけします。

免許証拝見出来ますか。」

「あ、

はい。」

私は免許証入れから

免許証を取り出して渡した。

「タクシーの運転手さんですね。」

二種免許のところを見て

警官が言った。

「はい、

そうです。」

「タクシーの運転手さんは

たいがい白い手袋してるんで、

すぐわかるんですよね。」

警官は私に手にはめている

手袋を見ながら

親しげに言った。

タクシーを降りて自家用車に乗り換えても

素手^{すで}でハンドルを握っていると

手が痛くなってしまったために

手袋がはずせないのだ。

「
どうも

ありがとうございます。

これお返しします。」

警官が免許証を差し出した。

私が受け取ると

「申し訳ありませんが、

ちょっと、

ハーツ、

てしていただけませんか。」

私は

「ハー」

がどうも嫌^{いや}なのだ。

歯医者からは

歯周病や歯槽膿漏^{しそうのうろう}は大丈夫だと

太鼓判たいこばんを捺おされてはいたが、

口の臭においを

嗅かがれるのには

抵抗があつた。

どうも

屈辱を感じるのだ。

私が躊躇ためらっていると

「こっちに向かつて

ハーツ

てしてみてください。」

あくまでも

臭いを嗅ぐぞーっ、

逃がさないぞーっ、

というように

私をじっと見た。

私は仕方なく

覚悟を決めて

「ハーッ」

と口から息をはいた。

なんだか

自分のお尻の穴の臭いを

嗅がれているようで、

勢いよく出すことが出来ない。

「ん？」

警官は首を傾^{かし}げて

怪しむように

「もっとこっちに向けて

勢いよく

ハ―

てしてください。」

怪しんでいるな。

パンはちょっと

アルコールみたいな匂においが

するかも知れない。

それで疑っているのかなと思った。

私は意を決して

警官の顔に真つすぐ

ハ―

と息をかけた。

オエ―

突然

警官が

顔を歪めて吠えた。

「行つていいです。」

警官は苦しそうに言つと

手を振つて

行くように促した。

そして

オエー

オエー

吠えながら、

市団地入り口にある

スナック「玉玉」の前の

暗がり

身をよじり

スナックの扉にもたれて

腹を手でさすりながら

オエー

オエー

つと涙を流している。

「なんだよ。」

失礼だな。

ハ―

てやれって言ったのは

そっちだぞ。

頭に来る。」

ムカムカ

しながら車を発進させた。

やはり

あのツナオニオンが

生臭かったのかな。

それにしても屈辱だよ。

ゲロしそうな口の臭いだって

言ってるのと同じだろう。

しかし

まてよ。

俺って自分じゃ気がつかないだけで

ほんとは臭いくさのかな

と思いもしたが、

あの時以来、

訳もわからないまま

いまだに傷ついている。

第39話 別れの一本

仲間の尖田は

馬山駅で客を降ろして

飲み屋街を

ゆっくり流していた。

まだ明るい

夕方近く

それぞれの店が

これから仕事を始めようとしている時間だ。

繁華街だけあって

人通りが多い。

ふと

見ると先のほうに

「おー」

と目を引く

真っ白な足が

超ミニのスカートから

スラリと伸びている

金髪女性のうしろ姿を

発見した。

尖田は女と見れば

どうしても

チョツカイを出したくなる癖くせがある。

追いつこうと

急いで車を飛ばしたが

女性は路地を曲がってしまった。

車がそこへたどり着いたときには

人込みひとごみに紛まぎれて

向こうのほうへ

行ってしまっていた。

「まあいいか。」

尖田は気を取り直して、

南口に回ろうと

東の踏み切りへ向かった。

道路は

夕方のラッシュの時間帯で

混んでいる。

踏切の手前に差し掛かったとき

遮断機が降りてしまった。

電車も本数が増えている時間だ。

踏切がなかなか開かない。

人も車もイライラしながら

遮断機しゃだんきが上がるのを待っていた。

ここは

JRと私鉄両方の踏切が続いている。

一つの踏切でも大変なのに

二つもある。

ここは車の量が多い割りに

道路が曲がりくねっていて狭い。

だから

ラッシュのときなどは

人も車も^{ひし}奔めきあつて

混雑してしまう。

尖田は

踏切から二、三台目のところに

止まっていた。

しかし、

遮断機の横で

先程^{さきほど}から

そわそわしている

おばあさんが気になっていた。

目が定まらず、

何かに怯^{おび}えて

焦点が定まらない。

心ここにあらずという様子だ。

どうしちゃったんだろう。

何か

いそがなければならぬことでも

あるのかな。

と、思っ

見るともなしに見ていた。

やっと

電車が走って来て

踏切を通過している。

突然、

何を思ったか、

うしろ向きになったおばあさんが、

はいているスカートをたくし上げ、

バンテイーを

途中までずり下げると

お尻を突き出して

中腰になった。

お尻の穴が丸見えだ。

尖田は目がくぎづけになった。

そのとき、

おばあさんの尻穴が

盛り上がるように膨^{ふく}れあがった途端、

スローモーションになって

それを押し開^あけるように、

ズルーツ

と太い一本糞いっぽんぐそが、

長く垂れ下がって

ボタリと下に落ちた。

気づいた周辺の人達が

驚いて

ワッ

と距離を空あけたが、

同時に

サッ

とおばあさんはスカートとパンティーを

元通りにしたかと思うと

何事もなかったかのように、

電車が通り過ぎて

遮断機が開いた

踏切を渡って行った。

0コンマ何秒かの

早業だ。^{はやわざ}

尖田はおばあさんの

膨らんだお尻の穴を押し開けて^あ

スローモーションで、

うんこが姿を現す^{あらわ}ところが

トラウマになってしまった。

ご飯を食べているときでも、

テレビを見ているときでも、

何をしているときでも

繰り返し

頭の中でリピートしていた。

仲間が集まったときに

その話が出た。

タクシー乗務員は

全員うんこでは辛いつらい想いをしているために

おばあさんに同情して、

「駐車場の柱の陰ですとか、

もう少しなんとかならなかったのかね。」

と話したりしていた。

すると

東京でタクシーをやっていた下畑が

「東京でタクシーやってると

トイレを探すのが死ぬ想いだよ。

俺なんか

何回も漏らしそつになつたよ。」

と言つた。

第40話 東京では（前書き）

読者の皆様、いつもありがとうございます！

書く時間がなかなかとれませんが、進みが遅くて申し訳ありません。おバカ小説で内容が上品とはなかなか言えませんが、私にも何が出て来るのかよくわかりませんので、もっと下品になってしまったらどうしようと心配しております。不備な点がございましたら、懲りずにお許しくださいますようお願いいたします。

第40話 東京では

下畑は

東京都内を

タクシーで流しているとき、

急に腹が痛くな^{はら}った。

麻布のあたりだ。

シクシク痛みだしたと

思っていたが、

そのうち

一気に圧力を増した。

「出てえんだよー。」

飛び出すぞー。」

大便是我が物顔ものがあに

その主人を脅迫きようはくして

あば
暴れ回る。

「うんこ、

チャチャチャ、

うんこ、

チャチャチャ、

うんこ、

チャチャチャ、
」

大便の主人は

うんこの圧力に耐えきれない状況になると

悲しいかな、

訳もわからず

意味不明なことを口走るものだ。

なんで

「うんこ、

チャチャチャ」

なのかわからないが、

何かへのエールなのだろう。

東京では公園の公衆トイレを

探すしかないのだが、

いつも使っている公園まで

行くのが大変だ。

東京は道が混んでいる。

思うように走れない。

いよいよ、

うんこ圧力が上がって来て、

「うんこ」

チャチャチャ」

が早くなってきた。

「あー。

出ちゃうー。」

猛^{もう}スピードになった

「うんこチャチャチャ、

うんこチャチャチャ、

うんこチャチャチャ」

が機関銃のように

口をついて出て来る。

脂汗あいらあせが

体中から噴ふきだした。

めまいがして

頭がグラグラする。

いつもの公園が見えて来た。

ホッ

とはするが油断は出来ない。

ホッ

とすると

肛門も

ホッ

としてしまつ。

そうなると

うんこは容赦なく暴走してしまつ。

ここは冷静に対処しなければならない。

やっとの想いで

公園に横着けた。

「早く。

早く。」

気が焦って

シートベルトを

外すのももどかし^{はず}く

車の外へ飛び出した。

二、三歩歩いて

硬直^{こうちよく}した。

歩けない。

トイレまでもたない。

東京では絶対漏らすことは出来ない。

どうしよう。

と思ったとき、

思わずズボンとパンツを

膝^{ひざ}まで下^おろしていた。

そのまま

中腰になってトイレに走った。

へっぴり腰の肛門から、

屁^へだか、うんこだか

わからないような音をだしながら、

うんこがポトポト落ちて、

地面に点々と残っていく。

しかし

滑^{すべ}り込みセーフとは言えないまでも、

とりあえず

漏^もらすことだけは避^さけられた。

下畑の話を聞いていた仲間が

笑いながら聞いた。

「それは昼間だったんかい。」

「そうだよ。」

「昼間じゃ、

誰かに見られたんじゃないかな。」

「見られたって、

漏らすよりいいよ。

カッコつけちゃいけないんだ。」

「それもそうだけども。」

「東京じゃ、

絶対漏らすことは出来ないんだから。」

下畑は東京では当たり前だ

というように言った。

以前、

私が東京の公衆トイレに入ろうとしたとき、

トイレに向かって

うんこが点々と落ちていたことがあった。

そのときは

何でこんなところに落ちているんだろう、と

不思議に思っていたが、

下畑の話を聞いて納得した。なっとく

あれはタクシードライバーの仕業しわざだったのだ。

東京でタクシーをやるには

恥はじも外聞がいぶんもなく、

当然とうぜんのように

立ちグソが出来なければならなかったのだ。

さすが東京はハンバじゃない。

東京で稼かせぐには

そのくらいの根性こんじょうと

心構こころがまえがないと

務つとまらないのだろう。

それにしても

人間は切羽詰せつぽうまれば

何をしでかすかわからない存在なのだ。

第41話 野球中継

陽が落ちると

家路を急ぐ人々が増えて、

箱山駅北口のタクシー乗り場も

少し動きがよくなった。

乗り場先頭になって、

胡麻塩頭こまじおたまの

初老しよろうの男が乗って来た。

「角井団地」

あごを上げて

つっけんどんに言った。

「はい、

かしこまりました。」

何だか横柄おうへいな感じの客だ。

駅を出て国道へ向かって行った。

迎えむかの車が多く

信号で渋滞している。

ラジオでジャイアンツ戦の

野球中継しているが、

野球音痴やきぬつおんちの私は

アナウンサーの声や歓声が

耳を素通りして

聞き流しているだけだった。

「どっちが勝ってるんだ。」

その客が前触れもなく

ボソッ

と言った。

どという人なんだ。

ずいぶん偉えらそうな人だな。

と内心思ったが、

聞かれて言葉に詰まった。

ラジオを聞いていないのだ。

答えようがない。

「ちょっと前にラジオつけましたので

まだわからないんですが。」

とっさに答えた。

たしかに

スイッチを入れたのは

ほんの少し前なのだが

よく聞いていれば

どちらが勝っているか

くらいわかるのだろう。

「野球ぜんぜんわかりません。」

というのも

「なんだ、

野球知らないのか。」

と馬鹿にされるようで

気位きぐらいの高い私には

言えなかった。

ちょっと気まずかった。

その場をなんとかしようと

焦^{あせ}った。

野球を知らないのだから

黙っていればいいのだが、

黙っているのも癪^{しやへ}だ。

「ジャイアンツも

村上監督のときは

強かったですね。」

この客はジャイアンツファンだろうと

気をきかせたつもりだった。

野球ファンなら

その状況では

絶対言わない言葉かも知れない。

「だれだそれは、

だれだ。」

客は怒ったように言うと、

そのあと何を言っても

答えてくれなくなった。

川上監督のことを

村上監督と言ってしまったのだ。

私にとって

野球選手といえば

川上、王、長島

くらいしか名前を知らないが、

野球好きの人は

信じられないほど

こまかいところまで

野球のことをよく知っている。

そこへもってきて

川上を村上と間違えるほど

野球を知らないやつが

知ったかぶりしやがってと

ムカツ

としたのだろう。

「うわ、

なんで間違っちゃったんだろ。

言わなきゃよかった。」

あとの祭りだ。

私はどうしようもない

自分自身の茶番ちゃばんさに

体が熱くなつた。

あぶらあせ したた
脂汗が滴つて、

なさ
情けなく口をすばませ、

目をパチパチさせながら

ハンドルを握にぎつた。

気位が高いというのは

思つてもみないような

災難を引き寄せるものだ。

もっと

正直に生きるべきなのだ。

その人は

毎日タクシーに乗って家まで帰るので

角井団地と言えは

わかるようになっていた。

団地といつても

一般的な団地ではなく

普通の分譲地だ。

その家は表から見ると

普通の家だが、

外壁に大きめの白いタイルが

全面に張られている。

タイル張りはお金がかかるらしいが

高給取りなのだろう。

後日

同じ町内会に住んでいる仲間の

菜^{ながし}榎に

どういう人なのか聞いてみた。

菜榎の情報では

田塚さんという人で、

元、^{くまだぞうじ}荃田総理の

第一秘書だということだった。

茎田総理が亡くなったあと、

自民党の仕事をしているらしい。

この地域はどういうわけか

茎田総理関係者に

縁があるらしい。

それから

しばらく日にちが過ぎた夕方、

北口先頭の無線で

私が出された。

無線の指示に従って行くと、

そこは県営団地近くで

路地の奥まったところにある

元ラーメン屋の家だった。

第42話 元ラーメン屋

薄暗く雰囲気よくない

一戸建ての貸家だ。

表から見る限りでは

元ラーメン屋だったとは

気付かない。

もともと

普通の家だったものを

無理矢理

ラーメン屋に改装したのかも知れない。

路地の奥は行き止まりになっている。

その家の先に空き地があつて、

そこで

車をユーターンして玄関前に着けた。

アルミの引き戸が閉まつたままだ。

人がいるのかいないのか、

^{ひとけ}
人気がない。

出て来る様子もないので、

車を降りて

アルミサッシの引き戸の前に立った。

何気なく脇を見ると

木の看板が下がっていて、

文字が書いてある。

「日本環境党」

日本環境党って何だろ。

党って付くということは

政治結社か。

何か胡散臭い気が

しないでもない。

どういう人が出て来るのだろうと

思いながら

「毎度ありがとうございます。」

箱山タクシーです。」

声のトーンを上げて声をかけた。

「おう、

今行くから

ちょっと待っててくれ。」

中からガラガラの太い声が

聞こえて来た。

怪しいな。

何かヤバそうな感じだ。

不安な気分で

車に戻って待っていた。

すでに

太陽が西の山々の向こう側に

入って行くとしている。

秋の日は釣瓶^{ししゅうへい}落とし、

辺^{あた}りは薄暗くなってきた。

路地が狭いので

車が入って来やしないかと

気を揉みながら待っているが、

こちらの状況などお構い無しで

なかなか出て来ない。

車が来るとすれ違えない場所なのだ。

何やってるんだろう。

困らせるために意図的に

焦らしているんじゃないのか。

絶対これはわざとやっている。

そうとは思えない。

これ以上待てない。

最近は

タクシー業界も厳しくなつて来て、

迎車料金や待ち時間の料金を

サービスする風潮が

蔓延^{まんえん}して、

おいそれと

大っぴらに待ち時間を

入れる訳にもいなくなっている。

あとからトラブルの種になってしまふ。

疑心暗鬼が渦巻いて

イライラしてきた。

痺れがきれて

帰っちゃおうかなと

思い始めたころ

引き戸が開いて人が出て来た。

目がギラギラして

六十がらみの痩せた

カマキリのような

不気味な男が玄関を出て立っている。

黒い革靴に黒いズボンで

白いワイシャツに黒のスーツ姿。

そしてあとから

サンダルを履いた

背の低い丸顔で、

茶色っぽいズボンに

青い柄のシャツを着た

やはり

同年代の小太りの男が

出て来て

玄関の鍵を締めた。

すると

痩せた男が

「早くしろ。

モタモタするな。

乗るぞ。

お前はいつも遅いんだ。

馬鹿野郎。」

うわっ、

思ってた通りヤバイ奴だ。

私は緊張しながら

ドアを開けた。

「お前が先に乗れ。」

さっさとしろ。

もたもたしてんじゃねえ。

馬鹿野郎。

俺がいつも言ってるだろうが。」

ガラガラした

でかい声で怒鳴っている。

背の低い男は怒鳴られるまま、

黙って従っていた。

偉そうに何なんだこいつ。

横柄に威張り散らすこの男に

いい感じはしなかった。

二人が乗り込んだ。

「三ヶ崎まで行ってくれ。」

痩せた男が言った。

私は緊張しながら

車を発進させた。

車が路地を出て右折した。

両側に家が立ち並んで

まだ道は狭い。

その先の跨線橋の側道を抜けて

Uターンするようにして

県道へ出た。

そのまま

跨線橋を上って越えた。

「お前は馬鹿だから

何やってもダメなんだ。

俺がいつも言ってるだろう。

俺がいくら言っただって

お前は何もわかつちやいないんだ。

俺の話を真剣に聞いているのか。

もっと真面目にやれ馬鹿野郎。」

痩せた男は相棒を罵倒し続けている。

車は市街地を抜けて

田んぼ道へ出た。

「運転手さんよ。」

痩せた男がガラガラのほかでかい声で

話しかけてきた。

「何ですか。」

何を言い出すのだろう。

私も怒鳴られるのか

私は再び緊張が高まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9727h/>

公道（タクシー乗務見聞録）

2011年11月14日20時26分発行